清風の人
諸橋轍次博士を偲んで

諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業誌

諸橋轍次博士
生誕百三十周年記念事業
実行委員会 編

諸橋轍次博士絶筆（P.39「諸橋轍次博士の絶筆について」参照）

諸橋轍次博士　100年の軌跡

1883（年齢）　6月4日、新潟県南蒲原郡四ツ沢村（現在の三条市庭月）に、父安平と母シヅの次男として、教育者の家に生まれる。
1887（5）　父から『三字経』の素読を習う。
1896（14）　四ッ沢村立尋常小学校補習科卒業後、奥畑米峰の私塾「静修義塾」で3年間、通学・寄宿生活をおくりながら漢学等を研鑽する。
1904（22）　新潟県新潟師範学校卒業後、上京。東京高等師範学校国語漢文科に進学。ここに漢学を生涯の道と決め、学問と教育に生きる人生を歩み出す。
1908（26）　東京高等師範学校卒業後、群馬県師範学校の教壇に立つ。
1910（28）　東京高等師範学校漢文研究科卒業、同校助教諭となる。
1912（30）　最初の論文『詩経研究』刊行。
1918（36）　初めて中国へ出張する。
1919（37）　「支那哲学及び支那文学研究」のため、文部省より2年間の中国留学を命じられる。この留学中、完成度の高い辞典の必要性を痛感する。
1921（39）　中国より帰国後、男爵・岩崎小彌太より静嘉堂文庫長を委嘱される。東京高等師範学校教授兼教諭・國學院大學講師（嘱託）となる。
1925（43）　大修館書店店主鈴木一平から、漢和辞典編纂の依頼を受ける。
1926（44）　東京高等師範学校漢文科学科主任、大東文化学院教授となる。
1928（46）　文部省より中国へ出張を命じられる。大修館書店との間に『大漢和辞典』編纂の約定が成る。

1929（47）　論文「儒学の自的と宋儒の活動」により、東京帝国大学から文学博士の学位を受ける。
1930（48）　東京文理科大学教授兼東京高等師範学校教授となる。
1932（50）　東京文理科大学附属図書館長となる。
1933（51）　國學院大學学部教授兼附属高等師範部教授を委嘱される。
1934（52）　文部省より中国出張を命じられる（～1942にかけて、数回中国へ渡航。）
1937（55）　宮中の講書始の儀に漢籍進講を仰せつけられる。
1943（61）　『大漢和辞典』第一巻刊行。同年度の朝日文化賞を受賞。
1945（63）　東京大空襲により『大漢和辞典』全13巻の組版と資料を焼失。東宮職御用掛を拝命。東京文理科大学教授、同附属図書館長、東京高等師範学校教授を辞任。正三位に叙せられる。

1946（64）　東京文理科大学名誉教授となる。『大漢和辞典』編纂に再び取り組む。6年間、皇太子明仁親王殿下に漢学を進講する。右眼を失明。左眼も視力が衰える。
1955（73）　35年にわたり勤めた静嘉堂文庫長を辞任する。順天堂病院にて左眼の開眼手術を受ける。『大漢和辞典』原稿完成により紫綬褒章を受賞する。再起の『大漢和辞典』第一巻刊行。
1960（78）　都留文科大学が創設され、学長に就任する。浩宮徳仁親王御誕生に際し、御名号・御称号を勘申する。『大漢和辞典』全13巻完結。中華民国政府より学術奨章を受章する。

(1)

1962（80）　郷里下田村の名誉村民となる。
1965（83）　文化勲章[1]を受章する。文化功労者として顕彰される。第二皇子礼宮文仁親王御誕生に際し習活・御称号を勘申する。
1967（85）　青山学院大学講師を退職、一切の公職から退く。
1969（87）　皇女紀宮清子内親王御誕生に際し、御名号・御称号を勘申する。
1972（90）　『中国古典名言事典』刊行。
1976（94）　勲一等瑞宝章[2]を受章する。
1977（95）　『諸橋轍次著作集』全10巻完結。
1982（100）　『孔子・老子・釈迦「三聖会談』刊行。12月8日、永眠。銀盃一組を下賜される。
1983年　郷里下田村において名誉村民葬が挙行される（3月13日）。
2000年　『大漢和辞典』修訂版・語彙索引・補巻　全15巻完結。

(2)

清風の人　諸橋轍次博士を偲んで

諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業誌

ごあいさつ

祖父諸橋轍次生誕百三十周年の記念行事として各界の著名な方々が、それぞれの専門分野で講演をされた事は誠に有意義であったと考えます。

祖父にとって『大漢和辞典』の編纂そして完成は一生の大事業でありました。戦時中の紙不足、空襲による原稿の焼失、加うるに失明という困難を乗り越えて遂にこの大事業を全うした事は並々ならぬ精神力であったと思います。

また生まれ故郷である庭月は東京での雑踏を避けた、心の安らぎの場所であったのでしょう。毎年夏に庭月に帰る事を楽しみにしておりました。庭月に「行く」のではなく「帰る」のです。庭月の懐かしい友人たちと語りあい、そして子供のころ親しんだ山や川、田畑や道の一つ一つが思い出として残っていたのでしょう。

諸橋轍次嫡孫　**諸橋　達人**

生誕百三十周年記念事業として平成二十五年に記念講演会を開催致しました。

各界の第一人者による御講演を頂き、又毎回多数の方々から御聴講頂き、恙無く盛会裡に終了しましたことを厚く御礼申上げます。

昭和五十六年東京の日本閣で白寿のお祝いが催されました。これは親戚のお祝いの会で六十名程の会でした。大叔父は車椅子でお出になられましたが、その時のお話は三十分にも及び、こんなにお元気かと驚く程でした。読み聞かせる様に、ゆっくりと、確かりとお話をされ、誠実に生きよ、大道を歩む様にとお年を感じさせない、優しさと強さを感じさせるお話でした。私共の心の糧として忘れることがないと思っております。

記念講演会について、講師の先生方には遠路はるばる諸橋記念館までお出頂き大変感謝しております。安岡定子先生には大勢の子供達と大きな声で論語の素読をし、つゞいて大変楽しいお話をお聞きし、諸先生からは貴重なお話をお聞かせ頂いたこと、又聴講の皆様には多数のご参加を頂いたこと心より感謝申上げ御礼の言葉とさせて頂きます。

諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業実行委員会名誉会長　**須藤　謙亮**

目　次

（口絵）諸橋轍次博士絶筆二葉……1
諸橋轍次博士　百年の軌跡……2
ごあいさつ　**諸橋達人／須藤謙亮**……5
漢学の里　リニューアル諸橋轍次記念館紹介……7

〔Ⅰ〕**諸橋轍次博士生誕百三十周年記念大講演会**……10
情報化時代の漢字研究　**阿辻哲次**……10
莫言ノーベル文学賞授賞式の印象　**吉田富夫**……12
孔家の教育　**孔健**……16
日本漢字と地方色豊かな漢字　**笹原宏之**……18

〔Ⅱ〕**子ども論語塾**……21
『NHKこどもロンゴ』安岡先生による楽しい授業　**安岡定子**……21
子ども論語塾in記念館……24

〔Ⅲ〕**第五回諸橋轍次博士記念漢詩大会記念講演会**……25
『大漢和』を支えた人びと――記念館に残された校正刷りから　**円満字二郎**……25

〔Ⅳ〕**公益法人三菱財団人文科学研究助成金研究報告会**……31
諸橋轍次と近代中国に関する基礎的調査・研究　**李冬木**……31
諸橋轍次と胡適・周作人　**吉田富夫**……34
諸橋轍次博士の「留学日記」について　**佐藤亙**……37
諸橋轍次博士の絶筆について　**佐藤亙**……39

〔Ⅴ〕**諸橋轍次博士生誕百三十周年記念集中講演会**……40
諸橋轍次博士の教育について　**内山知也**……40
『大漢和辞典』出版秘話　**鈴木一行**……42
諸橋轍次博士の隠れた功績――「袁世凱加筆民國憲法草案」を中心に　**李冬木**……44

〔Ⅵ〕**諸橋轍次博士追想**……48
祖父の思い出　**諸橋達人**……48
〔対談要旨〕
「行不由径」　**諸橋轍次先生◇石井裕子氏**……53

〔Ⅶ〕**諸橋轍次博士生誕百三十周年記念**
書き初め大会報告・同大会入賞者……57

◎広告協賛各位……58

◎諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業実行委員会名簿／編集後記……59

漢学の里

リニューアル諸橋轍次記念館紹介

⓪導入展示―エントランスホール
・「漢学研究に生涯をささげた諸橋轍次」
・「ふるさと下田を愛しつづけた諸橋轍次」
"諸橋轍次との出会い"をテーマに、博士の長年の功績と故郷の人々とのふれあいから博士の人となりを紹介しています。

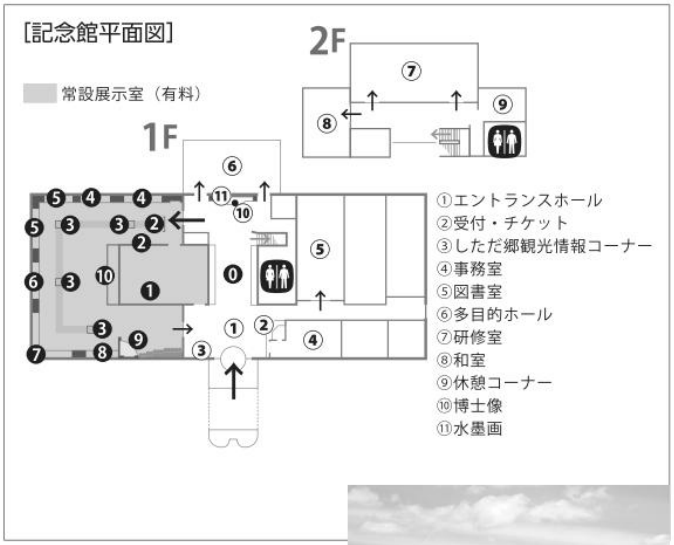
❶映像室
博士の生涯を紹介する映像作品を上映しています。

❷プロローグ
"ひと筋の道を歩む"をテーマに、諸橋轍次百年の軌跡（略年譜）から指標展示へとつづきます。

❸指標展示
・博士の軌跡と古典名言を重ねたテーマサイン。
・博士のことばと各時代を象徴する実物資料で構成。

コーナー展示：

❹教育者の家に生まれて　1883–1904
❺漢学への一歩　1904–1918
❻念願の中国留学　1918–1921
❼研究者として 教育者として 1921–1945
『大漢和辞典』の編纂
❽学問・教育の大道を歩んで　1945–1982



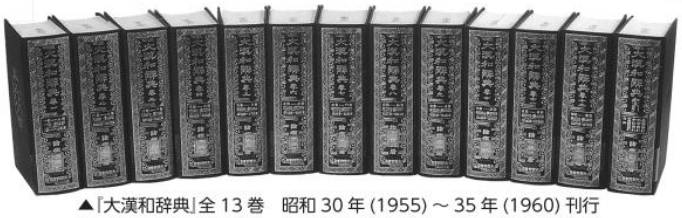
❾諸橋博士の漢字塾
『大漢和辞典』引き方体験・古典名言おみくじ、漢字手のひらクイズ・漢字サークルビジョンなど、大人も子どもも一緒になって楽しめます。

❿企画展示コーナー

▲『大漢和辞典』
幻の第一巻
初版本
昭和 18 年
(1943) 刊行

▲中国留学中に構想を練っていた学位論文
「儒学の目的と宋儒の活動」昭和 4 年 (1929)

▲『筆戦餘塵』(胡適との筆談)　博士は 2 年間の中国留学で、多くの学者たちと交友し、筆談で質疑応答を行いました。それを詳細にまとめた冊子です。



▲『大漢和辞典』全 13 巻　昭和 30 年 (1955) ～ 35 年 (1960) 刊行

◎諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業

〔Ⅰ〕大講演会

（1）情報化時代の漢字研究［阿辻哲次］
（2）莫言ノーベル文学賞受賞式の印象［吉田富夫］
（3）孔家の教育［孔健］
（4）日本漢字と地方色豊かな漢字［笹原宏之］

［記念大講演会ポスター］

〔講演要旨〕

情報化時代の漢字研究

阿辻哲次

阿辻でございます。大変晴れがましいところにお招きを頂きまして、心よりお礼を申しあげます。こちらには約三年ぶりに参りましたが、なつかしいなぁという感じと、いつきてもやはり素晴らしい所だなあというイメージが、つい二時間程前からよみがえったばかりでございます。

この「漢学の里」という、とりもなおさず中国でももっとも伝統的な学問のふるさとで、私が用意させて頂きましたものはご覧のように「情報化時代の漢字研究」というタイトルでございまして、「情報化時代の漢字研究」とはいったい何のことだろうかと不思議に思われる方もいらっしゃるかもしれません。

現在は、好むと好まざるとに関わらず、パソコンや携帯電話などの電子情報機器をあやつって漢字仮名交り文の日本語を書くというのが、小学生から年配の方まで、極めて当たり前の状況になってまいりました。飛行機や新幹線の切符をとるためには、かつては特にお盆とか年末とか帰省するためには長い列に並ばなければいけなかったものが、この頃はコンピューターあるいは携帯電話でもチャッチャッチャと切符が予約できようになりました。このようなコンピューターの発達が、日本語にもかなり大きな影響を与えてきているということを、今日はご紹介しようと考えております。

ところで世界の文字っていくつあるんでしょうか。いまの地球上ではいろんなところでさまざまな言葉を人々が話しておりますが、言語の数は大体四〇〇〇種類位あると言われています。それに対して、その言語を書く為の文字は大体一〇分の一で、昔から今まで使われた文字が大体

四〇〇種類位だろういわれています。

その中でも、漢字はいささか特殊な文字です。漢字と言えば、京都の漢検がやっている「今年の漢字」というイベントがございます。テレビのニュースでも良く紹介されますが、昨年の12月に発表された「今年の漢字」は「金」という字でしたね。それはそうとして、あれは今年の「漢字」だからできるわけですね。もし「今年のローマ字」は「P」に決まりましたなんていわれても、いったいなんのことだ、ということになりますね。

世界で使われている文字の中で、漢字以外の文字はほとんどすべて表音文字であって、漢字は表意文字である、それが漢字の最大の特徴です。

その漢字について、今の日本ではちょっと深刻な問題があります。

［講演中の阿辻哲次先生］

本日取りあげますのは「しんにょう」、皆様のなかには「しんにゅう」と読まれる方もたくさんいらっしゃるのではないかと思います。実は私も、どちらかというとしんにゅうと読む世代ですが、現在の学校では「しんにょう」と教えております。

さて、携帯電話をお持ちの方もたくさんいらっしゃると思います。その携帯電話で、メールを書いて相手に送る、あるいはパソコンで「目標に向かって邁進しようぜ」というメールを書いて送るときに、邁進の「邁」は点二つのしんにょう、「二点しんにょう」になります。それに対して「進」は点一つの「一点しんにょう」になります。あるいは、パトロールという意味の「巡邏」でも、「邏」は二点しんにょうであるのに対して「巡」は一点しんにょうです。「邂逅」はどちらも二点しんにょうです。

この邁進、巡邏、邂逅というのはパソコンで漢字に換えても、二点しんにょう一点しんにょうの「ばらつき」がでます。ところが「謎」という字を携帯電話で変換しますと、ほとんどの機械では一点しんにょうの迷が出ますが、パソコン（Windows7）か i-phone で漢字にしますとその部分が二点しんにょうになります。

「しんにょう」をどのように書くのが正しいというのは、実は決まっていないのです。いろんなものの上に書かれた字形では、それぞれの書体と筆使いによって、点が一つのこともあれば二つのこともあるし、三つに見えることもありますし、点がないものだってあります。

昔の中国に康熙（こうき）帝という皇帝がおりました。康熙帝はたいへん文化・勉強の好きな皇帝であり、いろんな大きな本を作らせました。諸橋先生の展示の中に『康熙字典』がございましたが、これを諸橋先生は大漢和を作るときの主要な基礎資料としてらっしゃるんです。その『康熙字典』では、ご覧のようにしんにょうは点二つで書かれています。つまり一七一六年に『康熙字典』ができてから、しんにょうは点二つの形が基準となったわけです。これから後一九四五年つまり太平洋戦争が終わるまでは、『康熙字典』の記述が漢字に関するあらゆる標準とされています。日本でも、漢字については『康熙字典』にどうあるかということがなによりも重要な根拠となり、戦後戦前の日本の活字も『康熙字典』に載ってる形で活字を作っていますから、戦前の印刷物のしんにょうは必ず点二つになっています。

昔から漢字は、手で書く時にはそれぞれ文字を書く人間が、自分の感性に基づいて最も書きやすい美しい文字を自由に書いてきた歴史があります。文字と聞けば、我々はすぐに印刷されているものだけを考えてしまいがちです。印刷するときにはこういう形で印刷する。それは、あくまでも印刷という一つのメディアの中での形があることは当然だろうと思います。しかし手で書くときにはもっともっと、小さな枝葉の問題にこだわらずに、自分の書きたい字形を書けばいい、と私は考えます。

文字とは個人の感性を発揮できるメディアで、漢字とひらがなとカタカナとローマ字と自由に使い分ける日本語であるがゆえにこそ、個人個人の感受性・感性・センスがそこに発揮できるという、日本人にとっては非常に幸せな道具であると思います。コンピューターによって、非常に画一化された字形が出てくる時代であるがゆえに、むしろ我々はもっとのびやかな自由な感性で文字を書いていくべきではないかというふうに考えて、こちらの話を終わりとさせていただきます。

（あつじ　てつじ・京都大学教授）

〔講演要旨〕

莫言ノーベル文学賞受賞式の印象

吉田富夫

こんにちは、吉田でございます。

ご承知のように、二〇一二年度のノーベル文学賞に中国の作家莫言（モオイエン）さんが選ばれました。中国人作家ということなら、二〇〇〇年度に高行健（ガオシンヂェン）という人が選ばれているのですが、高氏はフランス籍なので、大陸中国籍では莫言さんが最初というわけでした。

ぼくはこの十数年、莫言さんの作品のほとんどを訳してきたせいで、莫言さん、およびスウェーデン・アカデミーから夫婦で受賞式に招待されました。そう誰もが経験できることでもないので、その際の印象を今日はお話しようというわけですが、その前に莫言さんという作家について、また彼とぼくの付き合いについて、多少は述べておくべきでしょう。

莫言さんは一九五五年生まれですから、あの文化大革命世代ということになります。文学界にとどまらず、いまの中国の各界を背負っているのはこの世代です。ぼくよりちょうど二世代年下ということになります。

莫言さんを一躍世界的に有名にしたのは、一九八六年に発表した長篇小説『赤いコーリャン』でした。みなさんはひょっとしてその翌年にベルリン映画祭でグランプリを獲得した張芸謀（ヂャンイーモウ）監督作品の同名の映画で覚えていらっしゃるかも知れません。映画と小説では、物語の上ではかなり距離がありますが、中国農民の野性的な生きざまを描いたという一点では、映画はかなりよく原作の味を伝えています。

莫言さんは山東省は高密（ガオミー）県の農民の子ですが、文化大革命前後の幼少期に饑餓を経験し、さまざまな理由から中学校にも行けず、文字通り農民の子として育ちました。ですから、彼の心は農民そのもので、農民の目で世界を見つめ、農民の心で物語を書いてきました。くわえて、幼い頃に牛飼いをしながら孤独のうちに育てた空想力が、彼に強力な想像力を植え付けたらしく、のちに〈マジック・リアリズム＝魔幻的現実主義〉と呼ばれるようになる、あの『西遊記』も及ばないような奇想天外な物語の数々を生むことになり、それがこのたびのノーベル文学賞受賞

の理由ともなりました。

ぼくが最初に訳した莫言さんの作品は、長篇小説『豊乳肥臀』（上、下二巻。平凡社　一九九九年。のち、平凡社ライブラリー　二〇一四年）でした。作者の故郷の山東省高密県を舞台に、鍛冶屋一家の八人の姉妹が敵味方に分かれて殺し合う百年におよぶ壮大な物語ですが、それはそのまま二〇世紀の現代中国史でした。そこでは、国民党も共産党も毛沢東も、いわゆる馬賊を見るのとおなじ農民の目線をとおして、冷徹な批判の目で見つめられています。こんな小説を書いた作家はほかにいません。

それから、最近の『蛙鳴』（中央公論新社　二〇一一年）まで、積み上げれば優に三十センチをこえる莫言さんの作品をぼくは訳してきましたが、それがノーベル文学賞を受けることになろうとは、はじめは思っても見なかったことでした。ただ、数年前から毎年のようにノミネートされてはいましたから、ひょっとしたらとは思っていましたが、いざ現実となると、やはり興奮しましたね。

ただ、日本のジャーナリズムの反応は、莫言さんが作家協会副主席であるところから〈体制派〉ではないかといったことにばかり関心があったようで、作品の内容に踏み込んだ評価に乏しかったのには、いささかがっかりしました。

［講演中の吉田富夫先生］

さて、授賞式のことです。あの年の冬の北欧は雪が深く、ストックホルムは雪の世界でした。受賞式行事は十二月七日の受賞者講演会に始まり、八日の記念コンサート、九日のカクテルパーティー、そして十日の授賞式と受賞記念晩餐会と、およそ一週間つづきます。ぼくら招待者は、それに出席すればいいのですが、受賞者はそのほかに各国大使館や国王陛下の招待会などが盛り沢山ですから、大変です。

さて、一連の行事は、十二月七日の受賞記念講演から始まりました。講演会の会場は各部門の賞ごとに決まっていて、莫言さんの場合は文学賞を出すスウェーデン・アカデミーの第四講堂で、そこはかつて川端康成や大江健三郎がおなじ講演を行った場所でもあります。三百人も座ればいっぱいと思える講堂は招待者で満席でしたが、講演者の壇は一段と高くなっています。暖房のほとんどきいていない講堂の最前列に座りながら、かつて報道写真で見た光景を思い出しながら、感慨深いものがありました。この講演はすでに日本でもあれこれ翻訳されていますから、すでにお読みになった方もあるかも知れませんが、莫言さんはそこで自分が育ってきた過去を率直に語りました。ある人は、歴代のノーベル文学賞受賞講演でもっとも心打たれるものの一つであったと評しています。ぼくにとって、とりわけ感慨深かったのは、いまは亡き母親の思い出を語ったその冒頭でした。それは、こう始まっていました。

「ご在籍の淑女、紳士のみなさん。テレビやネットを通じて、みなさんは遙かな中国山東省高密県東北郷についてすでに多少ともご理解がおありでしょう。みなさんは九十歳になるわたしの父をご覧になったり、わたしの兄や姉や妻や娘や一歳四カ月になる外孫娘をご覧になったかもしれません。ですが、わたしの母を皆さんは永遠にご覧になるすべはありません。受賞後、あまたの人が私の栄光を分かち合いまし

たが、母は分かち合うすべがありませんでした」

こう話しはじめた莫言さんは、飢えと孤独の中でまっとうな人間として生きることを教えてくれた纏足だった母親の思い出を淡々と語りつつ、文学への目覚めとその後の歩みをたどりました。その内容は、英語をはじめ各国語（日本語はありません）に翻訳されたペーパーがあらかじめ配布されており、莫言さんは中国語を読み上げただけですが、大上段に振りかぶった文学論を振り回すことなく、おのれの過去を素直に語る姿に莫言さんの人柄をあらためてかみしめる思いでした。およそ五十分の講演が終って外に出ると、とっぷりと暮れた外は一面の雪でしたが、ぼくの心は温かく湿っていました。

そうそう、ここでぜひ言っておきたいのは、今度の授賞式に莫言さんが全世界から六カ国の翻訳者を招待してくれたことです。日本のぼくのほかに、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、それに地元のスウェーデンです。莫言さんの小説は、このほかロシア語や韓国語にも訳されています。それだけ多くの国で読まれている証拠で、そのこともこのたびの受賞の理由の一つだったでしょうが、それにしてもこれほど多くの翻訳者が招待されるのは、たぶん前代未聞でしょう。かねて、日本で翻訳者が軽視されていることに不満だったぼくには、うっぷんの晴れる思いでした。

それにしても、一連の行事のハイライトが十日の授賞式と記念晩餐会にあったことは間違いありませんので、その印象に移りますが、まず言っておくべきは、授賞式と晩餐会は会場が違ったということです。受賞者や招待客の宿泊先は俗にノーベルホテルと呼ばれることもある由緒あるグランドホテルでしたが、受賞式はそこからバスで三十分ほど離れた市のコンサートホールで行われ（四時半から五時四十五分）、ついでそこからさらにバスで二十分ほど離れたストックホルム市庁舎のブルーホールに移って晩餐会（七時から）となるのです。この市庁舎はストックホルムの観光名所の一つでもあるのですが、なにしろ雪降りしきる夜にバスでの移動です。ぼくはともかく、和服の家内は悲鳴を上げていました。

ですが、そこへうつるまえに、順序として受賞式に触れるべきでしょう。会場は、四階の観客席まで満席でしたが、入り口で厳重なチェックがありますから、およそ千人の人たちはすべて招待客なのです。ぼくらは四階から見下ろしましたが、そこがいちばんよく見える席なのです。通常はオーケストラの乗る舞台に半円形に椅子が並べられ、国王および王室関係者が向かって右手、受賞者およびアカデミー関係者が向かって左手に座り、受賞者は受賞理由を読み上げられた後で、国王からメダルを授与されるわけですが、受賞者一人ひとりにふさわしい音楽が演奏され、授与のあとは会場から拍手もあり、わが国の文化勲章などがひたすら厳粛で秘密めかしいのとはすっかり違った雰囲気でした。ただ、受賞者には午前中にリハーサルがあったようですから、しきたりそのものはきっちり守られているようでした。今回は京都大学の山中伸弥さんも受賞され、その座席も莫言さんと隣り合っていましたので、ぼくとしてはひときわ親しみを感じた節もありましょう。

さて、受賞式がめでたくすんで、市庁舎へ移動すべくホールの外の広場へ出たら、ホテルからここまでぼくら招待客を送ってきてくれたバスが影も形もないのです。いつの間にか降り出した雪で、見通しもききません。同じく莫言さんの翻訳者で、アメリカから来た旧知のゴールドブラット夫妻もうろうろしていて、よくわからないと言います。そのうち、広場の端の広い道に次々とバスが止まり、人を呑み込んでは走り去ります。そこで、どうやらそれが招待客専用バスで、それに乗れば市庁

舎まで運んでくれるらしいことがわかりましたが、この間案内もなにもありません。乗り込んでみると、中はタキシードにロングドレスの紳士淑女ばかりで、やっと安心しましたが、文字通りすし詰めです。

さてやっと市庁舎らしいところに着くと、これがパスポートから入場チケットまで、何重にもチェックするため、長蛇の待ち列です。雪は降りしきります。借り着のタキシードのぼくはコートも着ていてどうということもないのですが、先に触れましたように、家内は慣れない和服姿でしたからたまったものではありません。思わず愚痴も出ましたが、見回すとそんな雪の中で、肩まで露わにしたヨーロッパの女性たちは談笑しているのですね。やっと入り口のチェックポイントまでたどりついて見ると、なんと莫言さんの秘書役で来ていた莫言令嬢もすぐ後ろで笑いかけてくるのです。それで分かったのは、受賞者夫妻をのぞく招待客は、内外問わず一律に平等扱いなんだということです。それは、人を平等視するかの地の風土にじかに触れた思いのした瞬間でした。

そんな大変な思いもしましたが、中に入ると、アカデミーのマルムクヴィスト夫妻が待っていてくださり、招待客としては最上の席の一つに案内されました。市庁舎ホールはあまり広くはないのですが、そこにおそらく千人を超える人を詰め込みますから、席と席の背中は人一人が通るのがやっとです。席の配置はローマ字順に小さなパンフレットにしてあって、それをたよりに探すのですが、ぼくらはその手間も要りませんでした。

二時間におよぶ晩餐会は、仄聞していたように窮屈なものではなく、服装こそ男性はタキシード、女性はロングドレス、またはそれぞれ民族衣装ときちんとしていますが、食事の間には余興あり、会話あり、座ったままだと小型カメラでの撮影も黙認というふうで、楽しいものでした。ナイフやフォークなどがお隣の燕市の特注なのも嬉しいことでした。料理は前菜とメインの二種類ですが、せまい通路を擦り抜けては手品のようにさっと注いでくれる（この給仕ぶりがひとつの名物で、わざわざボランティアで修行するそうです）ワイン類はさすがに最高でした。ゆとりということばがありますが、あの晩餐会の雰囲気こそ、最上の知性のゆとりともいうべきものでしょうか。はめを外さず、節度をたもちつつ、みんなを心地よく過ごさせるというのは、なかなかにできることではありません。ノーベル賞のもつ知性の伝統があの晩餐会に典型的に現れていたようでした。

もうそろそろ終わりますが、最後に有名なノーベルチョコレートのことを申します。ぼくらは、きっとホテルの売店やそこらで買えるものと思っていましたが、なかなかどうして。あれは、ノーベル記念館でしか売っていないのです。ストックホルムの海辺の一つにガムラスタンという旧市街があります。そこは、ぼくらの宿泊したグランドホテルの近くで、スウェーデン・アカデミーはそこにありますが、それに隣り合ってあるのがノーベル記念館です。その中に小さな売店があって、ノーベルチョコはそこに、いかにも面倒くさそうに置いてあるのです。ぼくらはそのことを、現地でガイドもしておられたある日本人の方から教わったのですが、それでなければ慌てたことでしょう。察するに、あれをあれほど珍重するのは日本人に特有なのではないでしょうか。もっと前のことですが、京都にあるさる私立大学の学長さんは、そこの教授が受賞された際に全学の教職員に配るべく三千個だったかを購入され、日本で商品として販売しないとの誓約書を書かされたとか。ぼくはいくら買ってかえったか、それは内緒にしましょう。

つまらない話にご静聴、ありがとうございました。

（よしだ　とみお・佛教大学名誉教授）

〔講演要旨〕

孔家の教育

孔健

ご紹介いただきました孔健と申します。私は、中国山東省の出身です。この漢学の里は、今回で三回目です。

今日は「孔家の教育」というお話ですね。この『論語』の中に書かれている「孔子」というのは、実は私から遡りまして二千五百六十五年前の祖先です。孔子は、中国の山東省で生まれまして、私で今七十五代になっています。

私の先祖は、約二千六百年前に中国で生まれましたが三歳でお父さんを亡くしました。それで孔子は、五歳から自分で色々と「礼」「政（まつりごと）」を勉強しまして、三十歳で孔子塾を開いたんです。今日の雰囲気みたいですね、村の塾にはお年寄りの人から若い人まで多くの人が集まりました。有名な子路とか顔回など、後に名を残す人も孔子の弟子となり皆で孔子塾で一緒に勉強するようになりました。

その時孔子は三十代です。一所懸命勉強して、今でいいますと学校を作りました。四十代では、ただ教えるだけでは駄目だから国の為に頑張ろうと思います。孔子は、五十五歳で法務大臣になります。孔子は、法務大臣を二～三年ほどやったところで、世の中が乱れているから自分にはできないと思いました。それで、孔子は目指す「道」が行われないので、イカダに乗って海に出ようかというくらいに悩みました。

孔子は、政治の理想を実現できなくて絶望的になりまして、もう一回弟子達を連れて十三年間旅をしました。いろいろな場所を巡り、六十八歳位の時に孔子は故郷に戻って七十三歳で亡くなります。

中国人のイメージの孔子は、「教育者」と「哲学者」というところです。やっぱり、一番大事なのは教育の話です。ある日、孔子と弟子が一緒に出かけた時に弟子が「先生、あの国がよくなれば、どうするべきか？」と質問します。孔子は、「あの国がよくなれば、国民が豊かな生活をおくられる」と、こう答えます。弟子が続けて「国民が豊かになってから、もっとも大事なのは何ですか？」。孔子は「国民が豊かになってから、最も大事なのはやっぱり教育です」。皆さん、孔子の言葉は今と同じ問題ですね、教育はどれほど大事なのかと。

ある日、孔子は長男に「あなたは今何を勉強しているか？」と聞きました。「今は色々なことを勉強してます」。続けて孔子は、「詩を勉強しているか？」と言ってるんです、ポエムですね。詩を勉強してるかと聞いてるんです。長男の名前は、孔鯉といいますが「まだです、私は詩はまだ勉強していません」。すると、孔子は「それなら、すぐ詩を勉強しなさい」といいました。なぜだと思いますか？　皆さん。なぜ、詩を勉強するか？　中国の漢詩は「七絶五絶七律五律」これなんです。これ、全部決まっています。音声も決まっているし、枠も決まっているんです。

〔講演中の孔健先生〕

孔子は、なぜ子供に詩を勉強させるのか？　それは「枠」と「ルール」です。というのは、詩を勉強すれば、どこに行っても絶対ルール違反じゃなくなります。詩を書けば書くほど、このルールというものを守るようになります。

詩から、礼儀がわかります。詩を学ぶと礼儀がわかるから、孔子は子供に対してぜひポエム・詩を勉強しなさいと言いました。人間は詩を勉強しないと、ルールやマナーというところが分からない。だから、「詩を学ばないと駄目だよ」と孔子は言ったのです。

私の子供時代、三歳頃ですね。お父さんは、軍人でしたからお爺さんが教えてくれました。お爺さんが、孔子の話しを教えてくれたんです。四歳の頃、これ読めあれ読めと論語の本、読んでも読んでも四歳の子供だった私には何もわからない。朝早く起こされて、なぜいつも勉強しろ勉強しろと「私の人生勉強だけだ」「そうだよ、孔子の子孫勉強だけだよ、死ぬまで勉強だよ」。これが、子供時代のお爺さんとの会話です。

お爺さんのお蔭で私は色々勉強して、七歳から詩を書くようになりまして、小学三年生からあちこちに発表しました。今、私は本当にお爺さんに感謝しています。

「仁」は愛のシンボルです。ですから、日本の天皇陛下はほとんどこの文字を使うでしょ。なぜ、仁？　これを超えるものがないからです。ですから、天皇家がこの字を滑らかに使っているんです。

みなさん、仁は一番ですよ。やっぱり今までの時代も、これからも仁があるかどうかです。それから二番目は、中国人がよく言いますけど、やっぱり「義」です。義は、さっき言ったルールとかマナーということです。

そして三番目、仁義の次には、やっぱりこの言葉です。礼義の「礼」です。さっき私、佐藤さんの車に乗ってる時に石川忠久先生のＮＨＫの人気番組「漢詩紀行１００選」のＤＶＤがかかっていました。皆さん、やっぱり詩を勉強した方がいい、詩を勉強するのに年齢は関係ありません。

中国人も日本人も、やっぱり礼義の『礼』ですね。『知』というか『智』、何も知らないと智恵も生まれてこないからやっぱり知ることが一番大事です。

仁義礼知、最後は「信」じることですよ。皆さん、人間は信頼がないとね。お互いにそうだし、家もそうだし国もそうだし会社もそうです。

私は、何よりも今日感謝してるのは漢学の里で、こんな素晴らしい雰囲気の中で皆さんに会ってること。これからも、日本と中国は永遠にお互い、兄弟の道、親戚の道、同じファミリーで生きて行くということが一番大事です。共に論語を勉強して、共に感激して、共栄共存をすればするほど日本も中国もお互いに発展していきますから。

今日は、孔家の教育ということでした。これから、私も皆さんと共にもっと孔子を学んで論語を勉強していきたいと思います。やっぱり人生の最後の最後は、さっきの言葉、知識。お金がいくらあってもお墓には持っていけません。しかし、知識があれば墓に持って行けるし名前も名声も共に子々孫々まで残すことができます。

例えばですよ、あなたが詩を作ったら、たぶん諸橋轍次博士記念漢詩大会に出すでしょう。すると、『粤風詩筒』という作品集に載りますから子々孫々見られるでしょ。私のお爺さんお父さんは、こういう詩を発表した。人間はお金を残すよりも、名声。そして、あなたの作品、何でもいいです。絵でもいいし、何か残ればいいんじゃないかなと思います。

私の今日の話は、あくまでも個人的な考え方と発想ですね。私は、孔家の教育をもっともっと充実しないと駄目だと思います。こういう点で

は、日本の教育ほど素晴らしいのはないだろうと思っています。中国人が、日本人に学ぶべきところはいっぱいあります。ぜひ、これから皆さん我々の方にも教えて下さい。皆さん本当に、ご清聴ありがとうございました。

（こう　けん・孔子第七十五代直系子孫）

〔講演要旨〕

日本漢字と地方色豊かな漢字

笹原宏之

只今、ご紹介にあずかりました早稲田大学の笹原でございます。今日はどうぞ宜しくお願い致します。

さて、今日は日本の「国字」についてお話しいたします。日本人が作った漢字ですね、日本漢字と呼ぶこともあります。それともう一つ、「地方色豊かな漢字」についてです。漢字に地方色なんていうものがあるだろうか？　とお感じになられるかもしれませんが、漢字というものは私達と共にありますので、実は私達が使いやすいように必要と思うように姿を変えてくれる。それも漢字の懐の広さだと思っております。

地方によって、違った形の漢字なんてあるかなあとお思いの方もいらっしゃるかと思います。恐らくこの土地で一番身近と思われる字として、こういう字がありませんでしょうか。「氵」に写真の「写」と書く「泻」字ですね。新潟の「がた」という字となりますよね。新潟の「がた」は普通はこういう「潟」字が正しいとされていますが、やはりこっちの「泻」の方が簡単ですよね。

実はこの新潟の「泻」という字は、現代読めるという人はほぼ新潟県民に限られております。日本中で通じていると思われますか？　実は、ほとんどの人は読めないのです。

江戸時代には、日本中で新潟の「がた」という字はこの略字で書かれておりました。松尾芭蕉も井原西鶴も「かた」という字を書く場合、八郎潟でもどこの「かた」でも「泻」で書いておりました。日本中で使う略字だったんですね。ところが、「潟」という字自体を戦後はあまり使わなくなった。地名としてはよく使うということで、「泻」はほぼ新潟にだけ残っているのです。言ってみれば由緒正しい略字がここに残っていると言えます。

こういうものが生活の中で生まれております。諸橋先生がお作りになった『大漢和辞典』に集約された中国古典の中の漢字の世界とは別に、またこういう日本人の為の漢字の世界というのがあるんですね。

日本製漢字は、意外と身近な作り方をしてますね。「はた（け）」という言葉があります。田んぼと畑がありますが、実は田んぼの「田」は象形文字で中国製ですよね。「デン」というふうに読みます。中国の人は田んぼだろうが畑だろうが田（デン）と言っておりました。区別がなかったんですね。ところが日本人は農耕民族として、田と畑をはっきりと分けていました。それで、「田」を「た」と「はた」と両方に読めばいいんですが、日本人は漢字も分けたかった。火で燃やして作ったはたけ（畑）、実際に、火で焼いて土をよくする焼畑農業という農法が平安時代以降広まっていくわけですが、それに伴ってできた国字なので本当に火をイメージしていたのかもしれません。あるいは、水田と違って水がないから「火」という発想したのかもしれませんね。こういうわかりやすい、意味と意味を合わせて作る字のことを「会意文字」といいます。これは、日本人が平安時代の半ば以降に作り上げた日本製漢字、つ

まり「国字」ということになります。

実は今日の午前中に、この記念館の書庫の中に保管されている『大漢和辞典』の戦前からの資料、どうやって『大漢和辞典』を作ったかということがよく読むとわかる資料が残っていまして、それを館の皆様のご厚誼により拝見しておりました。そうしたら面白いことがありました。実は朝鮮・韓国でも田んぼと畑は言葉として分けています。田んぼのことを「ノン」と言って、畑のことを「パッ」というふうに言います。「パッ」と「はた」はちょっと発音が似ていますよね、元々つながりがあるんじゃないか、語源が一緒じゃないかと言う人もいます。ノンは「水田」を縦にくっつけた合字になりました。これは、六世紀ころから朝鮮の人がすでに使っているので、先に朝鮮でこうやって字を区別をしたんでしょう。それから、日本に渡来人としてやって来て、こうやって分けるといいよというふうに教えてくれたんだと思います。それからは、日本人の発想で、じゃあ「田」と「畑」（より古くは畠）と分けようというふうにしたものと思われます。『大漢和辞典』はよく読むとこんなことがサラっと書いてある。そういうものまで見つかりますので、『大漢和辞典』は本当に汲めども尽きぬ日本の財産いや世界の宝物と言ってもいい、世界遺産として登録してもいいぐらいの辞書だと思っています。

［講演中の笹原宏之先生］

国字を作るパターンとして、もう一つ実は重要なものがあります。それは、人の名前に見られます。柿本人麻呂だとか安倍仲麻呂だとか、麻呂がつく人が昔から何人もいるわけですが、その「麻呂」という字も実はちょっとした変化を生み出します。奈良時代の正倉院文書を見ていたところ、色んなことに気がつきました。その一つとして、「麻呂」が次第に「麿」へとなる、「合字」と呼ばれる新しいタイプの国字がそこに生まれていたのです。こうやって、国字を作るパターンが法則としてできあがれば、あとは個々に字を入れていけば、いくらでもできていくわけですね。そういう時代になっていくわけです。

この記念館に来るまでの間に、バス停でこういうところがありました。「棚鱗」なんと読みますか？　やはり「たなひれ」ですか。東京の人なら間違いなく、「たなうろこ」と読んでしまうと思います。なんで「ひれ」と読むかご存じでしょうか？　これは、北陸の辺りで「うろこ」のことを昔、方言で「ひれ」と言っていたようです。鱗を「ひれ」と方言で言っていたので、鱗（うろこ）と書いて「ひれ」と読んだ。こういうものを「方言漢字」と私は呼んで、全国で採集しています。『大漢和辞典』にも部分的に収められています。

では、最後になりますが創作漢字は残るかというところですね。もしかしたら、国字を新しく作って広まっていくという時代は、情報機器の発達によって終わったのかもしれませんね。逆に、携帯電話に入っている「絵文字」の中から、一番いいものを選んで自分の気持ちをうまく伝えていく、そんな時代になったのかもしれない。そうした絵文字も結局、日本人がデザインしていますから、そして意味を託したりしているということは国字にちょっと近いものがありますね。よいものが残り、そうでないものは使われずに消えて行くという現象が絵文字の世界にも見られます。こういうふうに、日本人は文字・記号が好きで、漢字さえ

も自在にいじってきたのでした。

諸橋先生とお弟子さんたちも、そういう漢字・国字の中で世に広まったもの、これはと思った方言漢字は辞書に取り込んでいかれていたわけです。漢字は、過去のものにすぎないというふうに思われがちですが、私は、漢字を新しく作ることは難しくなったとしても、過去に作られた漢字の中でよいものを復活させる、そして、新しい使い方をそれに与えるなんてことは、私達自身にまだまだ許されていることだと思います。

日本の漢字は、このように一言で言うと「多様性」に満ちていますね。中国の漢字は、色々あるばあいには一つだけに統一するという傾向が割合に強いんです。それに対して日本人は色んな漢字を作っておいて、その中から今その場に合う一番いいものを選ぼうということをする。

外国から入ってきたものを、巧みに加工してその中から一番いいものをその場その場で選べるようにしておく状態を私は「豊か」というふうに呼んでいいんじゃないかと思っています。

日本人は感性も豊かで、情緒も豊かだと思います。そのことを誇りに思いながら日本の漢字そして方言漢字を使いつづけていただければと願っております。では私の話ここまでとさせて頂きたいと思います、ご清聴ありがとうございました。

（ささはら　ひろゆき・早稲田大学教授）

◎諸橋轍次博士生誕百三十周年記念

〔Ⅱ〕子ども論語塾

・『ＮＨＫこどもロンゴ』の安岡先生による楽しい授業

［安岡定子］

［子ども論語塾 in 記念館のポスター］

〔講演要旨〕

『ＮＨＫこどもロンゴ』の安岡先生による楽しい授業

安岡定子

こんにちは、今日は皆さんにお目にかかるのを楽しみにやってきました。限られた時間ですけれども、楽しくできたらなと思っておりますのでお付き合い下さい。

私のクラス色々ありますが、学校も含めて、毎日どこかで「論語」を読んでいます。

人間の体はうまくできているので、使えば使っただけちゃんと反応するようになります。特に今日集まってくれた小学生のお友達には考える習慣をつけて、いつでも考えられる人になってほしいです。

孔子という人は、二千五百年前に生まれました。さて、二千五百年前の日本はどういう状況でしょう？　早速考えて下さい、何時代だと思う？　難しいですか？　たぶん中学へ行ったら詳しく日本史はやると思いますが、縄文弥生時代です、そんな時代です。世界を見渡すと、中国では孔子が生まれました。ヨーロッパの方に行くとソクラテスが生まれました。インドに行ってお釈迦様です。ほぼ同時代です、大きな枠の中でくくると同じ時代です。

孔子は、よき人物を育てようと思いました、人を育てる。今みんな学校に行ってるでしょ、でも二千五百年前は学校がなかった。これはどういうことなのかなと知りたいことがあった時や、お友達を作りたいと思ったら、自分から先生のところに行かないと駄目なんですね。どうも孔子というすごい先生がいるらしいぞっていう噂を聞いたら、みんなとことこ歩いて行くんです。孔子のところに集まった人は、やる気満々の

人しかいないってことです。自分から、目的があって先生のところに行こうと思った人だけです。

さて、プリントを見て下さい。お星さまが付いているのがタイトルです。まずは読みます。二頁ありますが、全部続けて読んでいきます。最初のお約束覚えてますか？　読む時は背中を伸ばしていい姿勢で、これ以上出せないというくらい、いい声を出して下さい。間違えることは全然構いません。もう、本気になっていい声を出して下さい。

「子曰わく、学びて時に之を習う、亦説ばしからずや。朋遠方より来る有り、亦楽しからずや。人知らずして慍みず、亦君子ならずや。」

先程、水泳とかスポーツの話をしましたが、何か今好きなこととか熱中していることはありますか？　何でも、好きなものを思い浮かべて下さい。「学びて時に之を習う、亦説ばしからずや」の之のところに、それをあてはめればいいです。本来、これは孔子の言葉ですから、孔子が学んだのは先程も言った通りで古典です。でも、私達は日常の自分にあてはめればいいです。サッカー好きな子は、サッカーにあてはめればいいです。

「朋遠方より来る有り」「朋有り遠方より来る」どちらでもいいですが、朋ってお友達の友と違う字です。この「朋」は同じ先生について学んでいるお友達同士です。だから、今日ここに集まってる人も朋です。論語という一つのものを一緒に学ぶということで繋がっている。

この記念館の外に、「行不由径」（ゆくにこみちによらず）って四文字、建物についているの見ましたか？　「行不由径」というのは論語の中の言葉です。孔子の弟子の一人が就職しました。就職した先で、とってもいい部下に恵まれたんです。孔子がそこを訪ねて行った時に、孔子にその弟子が自慢したんです。僕の部下にはこんなに素晴らしい人がいますって自慢した時の言葉です。

「行不由径」ということは、横道にそれない、王道を行く、まっすぐ行くということです。

彼は仕事の時以外は私のところにやって来ません、その部下はね。「行不由径」ってそういうことです。だから、諸橋先生のあの言葉とっても素敵です。本当に生き方そのものです。

では、八個あるので最初の四つだけをみんなと一緒に読みたいと思います、子供と私だけ。立ってみたいと思います。では、プリントの最初四つを今立ったお友達と私だけで素読をします。プリントを手に持ってもいいし、もう耳だけを頼りでもいいし、どちらでもいいです。

［講演中の安岡定子先生］

「子、子夏に謂いて曰わく、女、君子の儒と為れ」というのは、みんなにプレゼントしたい章句なので入れました。子夏というのは孔子と四十以上歳の離れた若い弟子です。今ここに来ているみんなと私、例えば五～六歳の子と私との年齢差くらいですね。その若い弟子はとっても勉強家でした、真面目で勉強家で一生懸命勉強しました。けれども、知識ばっかり詰め込んでちゃ駄目ですよって先生が言ったんです。儒っていうのは学者です。学問を極めていこうと思うのであったら、君子の儒

になりなさい、仁も徳も全部身につけた人になりなさいと言いました。

孔子は、君子の儒になれと言いました。どういうことかというと、科学者になって大発明しました、それを人の為に使えるか、困っている人の為世の中の為に使えるのか、自分が得する為だけに使うのか、最後の分かれ道です。

君子は、自分がどんな時でも正しいことができる。「仁」を忘れないのが君子です。人は自分が悲しいことがあったり、ちょっと辛いことがあると、人の悲しみや困ってる様子になかなか心が向かないです、仁を発揮することができないです。でも、孔子の目指す君子は、自分がどんな状況にあっても優しさを忘れない、それが君子なのです。

みんなが大人になって、社会に出てうまくいかなくて嫌になっちゃうことがあったとします。でもどんな時にも「仁」が大切とか「徳」が大切っていうのは、変わりません。それは今も変わらない。一番人間の基にあるところの変わらないものが、どれだけ厚みがあるかで人は変わるんです。

［子ども論語塾の一風景］

「仁」とか「信」とか「義」とか「徳」のようなよきもので心のクッションができています。困った時、悲しくなった時、心が折れそうになった時、ああもう駄目だと思った時に、このクッションの中にふっと包み込まれる。そうすると心がポキって折れたりしないんです。もう駄目って思ったり、人を傷つけて終わりにしたりとか、絶対そういう人にはならないんです。

変わらない大切なものを、どれだけ沢山持っているかで人の心のクッションの厚みが変わります。そういうクッションをどれだけ厚く持っているかっていうのが人の差です。

長いお話になりましたが、みんながすごく真面目に聞いて下さったので嬉しかったです。声を出して読むというのを、ぜひお家でもやってみて下さい。今日は、お付き合い下さいましてありがとうございました。

（やすおか　さだこ・安岡正篤氏の御令孫）

●「子ども論語塾in記念館」

夏休みに子ども向けに全三回の講座「子ども論語塾in記念館」を開催しました。

八月十一日に開かれた第一回目は、教員サークルのＴＯＳＳＳＡＮＪＯと、記念館指導員の佐藤海山氏による授業です。

前半は「孔子とはどんな人」というテーマで、孔子や論語の成り立ちについて勉強しました。ことわざや四字熟語には、論語に由来するものも多く、「この熟語の意味を知っていますか?」という質問に、小学生が元気に手をあげて答えました。

後半は、論語を暗唱する授業です。論語の中から好きな言葉「マイろんご」を選び、それを日本語と中国語で暗唱し、最後の授業で発表することになりました。夏休みの大きな宿題に、一所懸命に中国語の発音を覚えていました。

第三回目の授業は、夏休み最後の日に開催されました。子どもたちは、覚えてきた「マイろんご」をみんなの前で発表。続いて、その言葉を色紙に書いて、手作りハンコを押します。急きょ、参観の保護者も作ることになり、子どもに負けぬ真剣な表情で取り組みました。出来上がった作品を見せ合い、和気あいあいと笑顔が広がりました。

三回にわたり論語について勉強した参加者に、最後に羽賀館長から、修了証が手渡され、「子ども論語塾in記念館」は無事終了しました。

〔「論語塾」に参加した子どもたち〕

〔「論語塾」参観の保護者のみなさん〕

◎諸橋轍次博士生誕百三十周年記念

〔Ⅲ〕第五回諸橋轍次博士記念 漢詩大会記念講演会

（1）『大漢和』を支えた人びと
――記念館に残された校正刷りから――

［円満字二郎］

［第五回漢詩大会ポスター］

〔講演要旨〕

『大漢和』を支えた人びと
――記念館に残された校正刷りから――

円満字二郎

諸橋轍次記念館には、『大漢和辞典』の校正刷りが二セット、まとまって残されています。一つは、一九三四（昭和九）年から一九三七（昭和十二）年にかけて組まれた初校で、製本済みです。仮にこれを「校正刷りA」と呼んでおきましょう。もう一つは、一九四五（昭和二十）年二月の事業中断までに進行していた最後の段階のもので、バラのままの状態です。こちらを「校正刷りB」としておきます。

AB二セットの校正刷りは、不朽の名著『大漢和辞典』の編纂過程を今に伝える、貴重な資料です。このような大規模の辞書の校正刷りが残っているのは、おそらく、世界でも類を見ないでしょう。今日は、これまであまり世に知られることのなかったこの校正刷りから、どんなことがわかるかをお話したいと思います。

校正刷りAでまず目立つのは、大量の親字が追加されていることです。その大部分は、『康熙字典』では義未詳とされている漢字です。また、少数ですが、『康熙字典』には収録されていない漢字も含まれています。追加された親字の数は、国構えの部首だけでも三十一を数えますから、全体では二千～三千字にものぼるかと推定されます。原稿段階での『大漢和』には、『康熙字典』を超えようという編集方針はなかったのです。

一方、熟語では、削除されているものが目立ちます。その多くは、「四馬路（上海の福州路の別名）」のような、現代中国語です。漢文の辞書としての性格を、よりはっきりと意識したのでしょう。また、「四分儀」を「四分」の子項目に繰り入れるというような、検索性を向上させ

るための修正も、組織的に行われています。

『大漢和』の編纂開始は昭和初年。それから十年ほど経った初校の段階でも、親字や熟語の収録範囲、熟語の配列などの編集方針に動きがあったわけです。目指す辞書の形について、試行錯誤がくり返されていたことが思われます。

次に、校正刷りBでまず貴重なのは、『大漢和』収録のほぼすべての親字について、活字の字形がわかることです。戦前、活字組版によって進められた『大漢和』は、空襲ですべての組版を焼失、事業存続の危機に立たされます。それを救ったのが、戦後、当時の最新技術であった写真植字による組版に切り換えたことでした。

ですから、現在の『大漢和』の親字字形は、写植文字です。それに対して、校正刷りBには「幻の五万字の活字」の字形が残されているのです。日本の印刷史において、これほど多くの漢字を活字でそろえたことは、空前絶後です。活字作成技術の頂点を伝える、きわめて貴重な資料だといえるでしょう。

校正刷りBでもう一つ特筆すべきは、『大漢和』編纂に関わった多くの人びとの名前が、ハンコや署名の形で残されていることです。国構えの部首の周辺だけでも、たとえば、諸橋博士の「心友」であった近藤正治先生（一八八三～一九五九）、初期からの協力者であった川又武先生（一九四五没）、後に修訂の事業を受け継いだ高弟の米山寅太郎先生（一九一四～二〇〇七）など、多くの先生方の名前が見つかります。

また、台湾出身で東京文理科大学を卒業した陳蔡煉昌（ちんさいれんしょう）（一九一二～二〇〇八）は、『大漢和』編纂に関わった、おそらく唯一の中国語ネイティブでしょう。この方は、戦後、台湾に戻り、台湾師範大学の教授を長年、勤められました。

校正刷りBには、これらの人びとの肉筆による赤字がぎっしりと書き込まれています。その内容は、典拠用例の増補・修正や、人物の伝記資料の追加などが中心ですが、中には、「なりて」を「なって」に、「あり」を「ある」に変更するというような、文語的な言い回しを口語調に近づける修正もあります。読者にとって少しでも読みやすく、有用な記述を心がけて最後まで努力していたようすが、よく伝わってきます。

校正刷りBは、戦前の編纂事業の到達点を示すものですが、同時に、戦後の編纂事業の出発点を示すものでもあります。ところどころに鉛筆で書き込まれた日付は、出版元の大修館書店で行われた、写植による組版の進行状況を記録したものだと思われます。

それによれば、たとえば、一九五七（昭和三二）年の四月に刊行された巻四は、その七か月ほど前、前年の九月に組版が開始されています。一日の組版量は、約八千字。手動の写植機では、ふつうの日本語でも一日一万字程度が上限だといいますから、大修館書店の写真植字部には、かなりの熟練工がそろっていたわけです。

写植機は七台あったようですから、一巻を組み上げるのに要した期間は三か月ほどだったと計算されます。とすれば、組み上がったあと、修

［講演中の円満字二郎先生］

正その他に使える時間はわずか三か月程度。そのハード・スケジュールを、十三巻目の索引が出版されるまで、約五年間にわたって続けたのですから、想像を絶する難事業だったことでしょう。

ところで、辞書の編集には、基本的な四つの観点があります。一つめは、どのようなことばを収録するか？　二つめは、どのように各項目を記述するか？　三つめは、どのようにして調べやすくするか？　最後の四つめは、以上をどのように実現するか？　です。

親字や熟語の収録範囲を変更するのは一つめに相当しますし、典拠用例を増補したり口語調の言い回しに改めたりするのは、二つめです。検索しやすいように熟語の配列方法を改善するのは三つめ。そして、五万字の活字を作った活字工や、写植のオペレータたちの仕事ぶりは四つめにあたります。二セットの校正刷りからは、『大漢和』に関わった人びとが、辞書編集のあらゆる側面で、毎日毎日、着実に仕事を進めていったようすを、うかがい知ることができるのです。

諸橋博士の『大漢和辞典』は、今も生き続ける文化の遺産です。記念館に残されたその校正刷りは、あの困難な時代を生きた人びとの生の仕事を伝える資料として、量り知れない価値があります。貴重な文化遺産として、ぜひ、これからも大切にしていってほしいと思います。

（えんまんじ　じろう・漢和辞典編集者）

◎諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業

〔Ⅳ〕公益財団法人三菱財団 人文科学研究助成金研究報告会

（1）諸橋轍次と近代中国に関する基礎的調査・研究［李冬木］
（2）諸橋轍次と胡適・周作人［吉田富夫］
（3）諸橋轍次博士の「留学日記」について［佐藤亙］
（4）諸橋轍次博士の絶筆について［佐藤亙］

［集中講演会ポスター］

〔研究報告一要旨〕

諸橋轍次と近代中国に関する基礎的調査・研究

李冬木

ご紹介に預かりました佛教大学の李冬木です。宜しくお願いいたします。

【概要】

当研究の目的は「諸橋轍次と近代中国との関係」という視座から諸橋轍次と中国学者、とりわけ五四新文化運動時期の中国学者との交流実態を調査し、もっぱら『大漢和辞典』の著者としてのみ諸橋轍次を評価する従来の視点を見直し、同時代中国知識人との人的交流という視点から、漢学者としての諸橋轍次の歴史的貢献について再評価を試みる。一方、諸橋轍次が直接交際を通じて残した記録や物品などを通して、中国五四新文化運動のこれまでほとんど知られていない側面を明らかにしようとするものである。

第一次的資料として、今までほとんど整理されていない墨跡である『筆戦餘塵　附知交翰墨』、『筆戦餘塵残滓』、『儒林墨蹟』、『辱知学人墨跡』、『辱知学人墨跡　二』、『辱知清儒墨跡』、『先賢遺墨』、『掛軸』、『残りの封筒　四』、および「中国留学日記手稿五冊」を中心に調査・整理し、研究を行い、中国留学期の諸橋轍次と中国人学者との交流および活動実態を明らかにすることによって、日中近代文化交流史の研究に新たな視野を開いた。

【背景および目的】

一九一八年四月初めて中国を訪問してから、一九四二年三月までに、諸橋轍次は中国を十数回訪問したと推測されているが、最も重要なのはその第二回目、すなわち一九一九年九月から一九二一年八月までの二年間の北京留学だと思われる。文部省の派遣で中国哲学と文学を研究する

ための留学であったが、この間、諸橋轍次は「中国家族制」に関する調査・研究を完成するかたわら、のちの『大漢和辞典』編纂への動機を育み、漢学者として本格的に次期の業績を築く作業を始めた。

この時期の中国はちょうど近代史上において「新文化」と「白話文学」が急速に歴史の舞台に登場し、伝統文化と伝統文学が急速に衰えてゆく、いわば新旧文化が激しく激突する「五四新文化運動」の時期であった。諸橋轍次は中国家族制の調査・研究のため、中国人との直接付き合いを通じて、身をもって中国近代史上の重大な変革を経験し、大量の貴重な記録を残した。

中国学者との付き合いに関しては、諸橋轍次『遊支雑筆』(『諸橋轍次著作集』第9巻)と『私の履歴書』(同第十巻)などに一部紹介されているが、先ほど、述べさせて頂いた墨跡と日記手稿などの第一次資料はほとんど未整理の状態である。

具体的には、『筆戦餘塵』、『筆戦餘塵残滓』、『儒林墨蹟』、『辱知学人墨跡』、『辱知学人墨跡　二』、『辱知清儒墨跡』、『先賢遺墨』、『掛軸』、『残りの封筒　四』、および「中国留学中旅行日記手稿五冊」である。

上述の墨跡と日記手稿は、諸橋轍次が漢学者として独立する以前の個人的履歴に関する重要な史料たるにとどまらず、当時の日中両国学者の交流実態を記録した貴重な第一次資料であり、「五四新文化運動」時期における日中近代文化交流史を理解するために、これらについて基礎的調査・研究を行うことは不可欠である。これが当研究の背景および目的である。

【調査・研究作業】

まず、本研究に必要なデータベースの構築。

その一は、撮影です。まず私たちの研究範囲をカバーできるあらゆる資料の写真を撮ります。次のような作業をおこないました。

諸橋轍次記念館リニューアルに伴う諸橋轍次記念館旧展示資料撮影
諸橋轍次記念館リニューアルに伴う諸橋轍次記念館新展示資料撮影
諸橋轍次記念館収蔵「諸橋轍次資料」撮影
(内訳：諸橋轍次旧蔵、掛軸・筆談集・書信集・アルバム・法帖・関係資料など)

その二は、先行研究の基本資料データ処理です。

大漢和辞典　十五巻
諸橋轍次著作集十巻

データベース化処理の作業にあたって、二万ページを超えた分量のデータを構築しました。

但し、ここでお断りいたしますが、これらのデータはあくまで内部使用に限っており、公開することはできません。

その三は、墨蹟の判読・翻字およびテキストデータ化、の処理です。

『筆戦餘塵 附知交翰墨』
『筆戦餘塵残滓』
『儒林墨蹟』
『辱知学人墨跡』
『辱知清儒墨跡』
『辱知学人墨跡　二』
『先賢遺墨』

これは大変困難な作業です。とりわけ翻字する際、文字の判読に当たっては、たくさんのものが我々の能力をはるかに超えましたため、中国の大学の漢籍整理の専門家や書道家等のご協力をいただきました。それにしてもまだ判読できない文字がいくつか残っています。

その四は、『掛軸』と『残りの封筒　四』の翻字、及びテキストデータ化です。五十八人のうち、十四人です。

写真の掛け軸は、五十八人の中に含まれていません。これは諸橋晋六先生個人所有のものであり、去年四月二十一日に、私達のために、わざわざ東京のご自宅から記念館まで持って来て下さったものです。詳しい内容は、後ほどの吉田富夫先生のご報告にお譲りいたします。

その五は、諸橋轍次『中国留学中旅行日記』五冊の翻字、及びテキストデータ化です。

実質記載枚数は五百二十一頁です。これも大変な作業です。詳しい内容は、後ほどの佐藤亙さんのご報告にお譲りいたします。

研究作業の内容は以上ですが、引き続き研究成果のまとめを申し上げます。

『筆戦餘塵　附知交翰墨』、『筆戦餘塵残滓』、『儒林墨蹟』、『辱知学人墨跡』、『辱知学人墨跡　二』、『辱知清儒墨跡』、『先賢遺墨』、『掛軸』と『残りの封筒　四』および『中国留学中旅行日記』五冊について調査・整理し、研究を行った結果、中国滞在中の諸橋轍次の活動実態を二つの側面から実証的に確認することができました。

一つは、中国人学者たちとの交流である。たとえ「掛軸」と「残りの封筒四」を除いて、上記八類の資料に収められた筆談と墨蹟だけでも三百四十八頁、百五十四点あり、関わる中国人学者数はのべ百五人である。人名重複と、実際に接していなかった学者を除けば残りが六十九人となる。これが、諸橋轍次が筆談または墨蹟を介して実際に接した中国人学者の数である。

［講演中の李冬木先生］

むろん、中国留学の二年間にわたる付き合いは人数的にこれより多いだろうと推測できるが、六十九人という数だけでも、これまで『遊支雑筆』や『私の履歴書』などを通じて知られている四十人ほどの中国人学者数を大きく上回る。新学と旧学の人物がほぼ相半ばしており、またそのほとんどが代表的人物であり、同時期の日本人学者の中で、接触した中国知識人の数的多さと質的高さで、諸橋轍次の右に出るものはいない。

いま一つは、各地で調査研究を精力的に展開したことである五冊の『中国留学中旅行日記』は十七省二十二市におよぶ百八十五日間の旅の記録であり、若き中国学者の船出時の奮闘記たるにとどまらず、当時の中国の姿をよく窺うことができる貴重な資料となっている。

上述の調査・研究は、『大漢和辞典』をはじめ諸橋轍次のさまざまな業績を再認識するに不可欠の基盤となり、また日中近代文化交流史の研究に新たな視野を開いたものである。

ここから、諸橋轍次研究、中国五四運動研究および日中近代文化交流史研究をめぐる新たな実りを期待することができるであろう。

これで、私の報告を終了させていただきます。ご清聴有り難うございました。

（り　とうぼく・佛教大学教授）

〔研究報告二要旨〕

諸橋轍次と胡適・周作人

吉田富夫

私の専門は現代中国文学で、諸橋轍次の学問や『大漢和辞典』とはいささか縁が薄いのですが、いろいろなことからこの研究にかかわることになりました。ただ、若き日の諸橋轍次が留学したのは現代中国の夜明けの時代でしたから、そのあたりで多少の繋がりはあるわけです。

諸橋轍次が初めて中国へ留学したのは、一九一九年を中心とするいわゆる五四運動の勃発当時でした。これは現代中国の夜明けを告げるたいへんな時代でした。この運動には〈救国〉と〈啓蒙〉の二つの側面がありました。救国とは、外国の侵略、とりわけ第一次世界大戦を契機にようやく中国への領土的野心を剥き出しにしはじめた日本に抵抗して国をまもるということです。

〈啓蒙〉は、それまで中国文化の基調をなした孔子の儒教のくびきから脱して、西洋の近代思想を全面的に受け入れようという運動です。孔子打倒とデモクラシー万歳がそのスローガンでした。当然、猛烈な反発が起きます。文化界は、進歩と保守に真っ二つに分かれての論争になります。

こうした〈救国〉と〈啓蒙〉で文字通り中国が真っ二つに割れて騒然となっていた時期に諸橋は留学したわけです。大変な経験と言わなければなりません。今日は、その五四運動の文字通り最先端にいた二人の中国知識人の胡適と周作人と諸橋とのかかわりについてお話させていただきます。

その前に、諸橋が残した「筆戦余塵」について、順序として少し触れなければなりません。口語による中国語会話の能力が必ずしも十分でなかったかと思える諸橋は、中国知識人との会話を主として筆談でおこない、それを丹念に残して「筆戦余塵」なる題名をつけて和綴じ本を作りましたが、そこに書かれた中国語古文、いわゆる漢文は、文章、文字、ともにまことに見事なものです。これまでその一部しか知られていなかったものを、このたび私どもの手ですべて活字に起こして公表することができたのですが、そのことの意味はまことに大きいと思います。が、それはさておいて、胡適との触れ合いも、その「筆戦余塵」に残されたもので知るわけです。

さて胡適（一八九一～一九六二）ですが、彼はアメリカ留学中の一九一七年に「文学改良芻議」を発表して、文学革命に火を点けた人です。諸橋が留学した当時は帰国して、北京大学の教授として健筆を振るっておりましたが、五四啓蒙運動の主要な担い手の一人でありました。その胡適との筆談は「筆戦余塵」の中でもことに長いもので、貴重な歴史の一頁です。これについては、月洞譲さんが『大漢和辞典』（修正版）月報十二に丁寧な訓読をつけてくださっていますから、より興味のあるお方はそちらを読んでください。

筆談の中で、胡適は自分が病中だと書いています。「今は病中で、頭

［講演中の吉田富夫先生］

を使ってはいけない、文章も書くなと医者から言われている」と言っています。このことは、胡適が残した日記にもありまして、それらを付き合わせて考えますと、諸橋が胡適と会ったのは留学一年ほども経った一九二〇年の秋ではないかと考えられます。

さて、筆談の中身ですが、諸橋は自分の研究の目的が中国の家族史であることを述べて、助言を求めています。さらに、広く中国思想史についても、諸橋は自分の考えをまず述べて、胡適の意見を求めています。こうして自分の意見をまず述べて、その上で相手の助言を求めるところが、諸橋の偉いところです。それに対して、胡適も、家族史については自分はよく知らないと述べた上で、家族史をやるのだったら伝統的な歴史の書物だけでは不十分で、『紅楼夢』のような俗文学も重要視すべきだというおのれの持論を展開しています。病中だと言いながら、おそらく二時間ほどにもわたって筆談をつづける胡適の忍耐力には、頭が下がる思いがします。諸橋のほうも胡適の「文革改良芻議」の一部を事前に訳したり、それの青木正児訳を紹介したりしていて、ここには近代の早い時期の日中学術交流の姿の一端が見られます。それを一口で言えば、どちらも初々しく、真摯ですね。思わせぶりなところや、相手をやっつけてやろうといった張ったりめいたところが少しもありません。時代がそれだけうぶで、若かったのでしょうね。

［周作人から諸橋博士に贈られた詩］

ところで、胡適と並んで、もう一人の五四文化運動のリーダーであった周作人（一八八五～一九六七）ですが、この人の名は「筆戦余塵」に出てまいりません。それも道理で、作人は兄の周樹人すなわち魯迅とともに長期にわたって日本に留学した人で、しかも妻は日本人でした。ですから、日本語で十分に意志が通じたはずで、筆談が残るはずがありません。ただ、諸橋が留学した当時の中国文化界にあって、周作人の名声はある意味では兄の魯迅をしのぐものがあり、諸橋は当然会ったはずです。ところが、周作人の記録は、いまのところ、諸橋の留学記録のどこにも出てきません。総じて、諸橋の留学記録は北京関係がほとんど残されていないのです。それには、諸橋が北京で身を寄せていた先に後の日本関東軍関係の人が多くいて、敗戦後の諸橋がそれをはばかってかなりの史料を廃棄した可能性が考えられます。

さらに、周作人については、日中戦争勃発後に日本が北京に作った傀儡政権に協力したことで戦後の中国で民族の裏切り者＝漢奸として裁かれたといったことも、諸橋の残した史料から作人の名が消えた理由かも知れません。ただ、諸橋の「私の履歴書」には「胡適や周作人や銭稲孫などは年齢も近いし、気も合っていたから半ばは学問、半ばは友達としてその後も長くつきあったが」とあって、その交わりの深さを偲ばせます。ただ、先に言ったような理由からか、周作人に関するかぎり、直接の交遊の記録を諸橋はほとんど残していません。

ただ、周作人から贈られた詩が『諸橋轍次著作集』第十巻にありますが、ただ、それがどういう形で贈られたかは書かれていなくて、事情はよくわかりませんでした。ところが、このたびの諸橋轍次留学資料の整理のための研究の過程で、それが実は軸物で、実物はいまは亡きお子さんの諸橋晋六先生のところにあることがわかったのですね。それで、昨二〇一三年に晋六先生にお願いして新潟の諸橋記念館までもってきてい

ただいたのが、写真でお見せするところのものです。これは五言律詩で、次のように読み下せます。

愁絶忘朝暮　　愁絶して朝暮を忘るるに、
甯知歳又闌　　甯(な)んぞ知らん歳の又も闌(た)けたるを。
天時回暖易　　天時の回暖は易きも、
人事轉機難　　人事の転機は難し。
慰藉逢良友　　慰藉(いしゃ)す良友に会いて、
傾談失舊懽　　舊懽を失いしことを傾談せり。
茫茫身世感　　茫茫たり身世の感、
想對涕汍瀾　　相對して涕は汍瀾(がんらん)たり。

大意はこうなりましょうか。

心浮かぬままに月日の経つのを忘れていましたが
もうこんなに年経てしまったのですね
自然の寒暖は変わりなくやってきますが
人間界の舵を切るのは容易ではありません
さいわい真の友人であるあなたにお会いして
失われた楽しい思い出を語り合えました
それにしてもこの世の変転に思いははてなく
顔を合わせて涙がはらはらと落ちてきます

問題はこの詩の注です。そこには、「錄郷人孫垓小至日贈人詩應諸橋先生雅令 作人」とあります。「郷人孫垓の〈小至日に人に贈る〉詩を録して諸橋先生の雅令に応ず」と読めます。つまり、「郷里の人である孫垓(がい)の〈小至日（冬至の前日）にある人に贈る〉という題の詩を抄録して諸橋先生のご依頼に応える」というのです。つまり、この詩は周作人本人の作ではなく、作人の同郷の孫垓という人の詩を借りて、自分の心境を諸橋に述べたものだったのです。

さて、孫垓などという詩人は知りません。京都大学の蔵書目録にも載っていません。昔なら、ここでことはひとまずストップしたかも知れませんが、いまや日中間はツーカーです。今日もお見えの同僚の李冬木先生が浙江省の友人に訊ねてくださって、すぐ分かりました。周作人や魯迅とおなじ浙江省紹興の人で孫垓（一八一三～一八八五）という人がいたのです。字は子九、号は少楼、晩年は退叟と号し、住居を退宜堂といったところから、『退宜堂詩集』六巻を残した、というのです。その伝記を読むと、立身出世をこととせず、骨のある生き方をした人のようですが、必ずしも世に容れられた人ではなかったようです。

こうして見ると、周作人がこの詩を選んだのには、なかなかに複雑な背景があったように思われます。中国から言えば抗日戦争中の北京で、おそらくはやむを得ずして日本支配に頭を屈して生きていた人の複雑な思いをこの詩に托して諸橋に贈ったのではないかとも思えます。

先にも述べたように、留学時代の北京の記録を諸橋はほとんど残していませんし、戦時中におそらく何度か顔を合わせたことのある周作人のこともほとんど語っていません。ですが、この贈られた詩を諸橋は著作集に収録し、もとの書は晋六先生の手元に残されたのです。この書を贈った周作人の心境も複雑なら、この書を著作集に収録した諸橋の心境もまた複雑であったろうと思われます。歴史を生きる人の心は、ともすればほんの小さな事物の中に隠されるもののようです。

これで終わらせていただきます。

（よしだ　とみお・佛教大学名誉教授）

〔研究報告三要旨〕

諸橋轍次博士の「留学日記」について

佐藤　亙

◎はじめに

諸橋轍次博士（一八八三―一九八二）の「留学日記」は、諸橋博士の一回目と二回目の中国行で書かれた五冊の手帳型日記帳を指します。この日記は、諸橋博士三男の故諸橋晋六氏の旧蔵で、二〇〇二年十二月に晋六氏により保存されていた全日記がマイクロフィルム化され、ナンバリングされています。

この五冊の日記は、二種に大別できます。一つ目は、「No.8」の第一回目の中国旅行。二つ目は、「No.5 No.6 No.7 No.9」の第二回目の中国行で二年間の中国留学。この二回の中国行は、『遊支雑筆』（昭和十三年十月十五日　目黒書店）に、博士自身の筆で上梓。また、『諸橋轍次著作集』第九巻（昭和五十年九月一日　大修館書店）にも収められていますのでご覧下さい。

◎第一回目の中国旅行について

「諸橋轍次著作集」第十巻二百九十九頁「年譜」に、「大正六年十月一日、支那へ出張仰せつけらる。（内閣）」とありますが、中国で洪水が発生したため渡航を延期、翌大正七年四月六日頃船上の人となったと推定されます。帰国は、日記No.8から現在の韓国釜山を船で出発、下関経由で、六月十三日午後九時五十分頃東京着と推定されます。

一回目の中国行では、行く先々で中国および朝鮮の学校を訪問しています。また、旅行中の上海では、王国維、沈曾植、瞿鴻機、繆筌孫。北京では、北京大学関係者の蔡元培、陳独秀、王健祖。京城では、金允植。

慶州では、孫瓚培等の著名な学者と会見しています。

◎第二回目の中国留学について

まず、二年間の留学の基地となる北京の生活は、1回目の中国行で世

No	目的地	日時と年齢	期間
No.5	山東旅行・江蘇浙江旅行・安陽探検	大正10年（1921）　39歳 4月23日～7月18日	75日間
No.6	函関行日記・長沙潭湘行日記・廬山行日記（一）	大正9年（1920）　38歳 3月25日～4月30日	37日間
No.7	廬山行日記（二）・大同廬山行日記	大正9年（1920）　38歳 4月21日～4月23日・ 10月10日～10月13日	7日間
No.8	第1回北京行、第1回天津行・泰山曲阜・大連、旅順、奉天、哈爾賓・朝鮮各地	大正7年（1918）　36歳 5月10日～5月19日・ 5月21日～6月10日	30日間
No.9	廬山日記・長沙日記・沙市宜昌日記	大正9年（1920）　38歳 4月23日～5月28日	36日間

［諸橋先生の中国留学一覧］

話になった坂西利八郎将軍に依頼。また、当時の三菱財団総帥の岩崎小弥太と諸橋先生の関係は知る人ぞ知る有名な関係。さらに、渋沢栄一の援助も忘れてはなりません。

さて、第二回目の中国留学日記四冊を日付順にすると、No.6・No.7・No.9・No.5となります。諸橋先生は九月五日、神戸港から海路五日間の九月九日で太沽港に着きます。帰朝は、大正十年（一九二一）八月十一日です。この出発から帰朝までの期間と、No.6・No.7・No.9・No.5の日記を照合しますと、どうやらこの四冊の日記は留学中に各地を訪問した旅行日記だという事が確認できます。

［講演中の佐藤亙先生］

不思議なのは、北京留学時の記述が「遊支雑筆」で不自然に少ないことです。この北京留学時期のものは、ほとんど記念館に残っておりませんし、「遊支雑筆」の記述も簡略です。当時、付き合った歴史的人物が日中ともに生存していたため、故意に記述を避けたとも考えられますが、北京留学時代の日記がどこかに眠っているとすれば、その発見に期待したいと思います。

「遊支雑筆」では、意図的か否か不明ですが旅行日記の記事が除かれている部分があります。除かれた部分には、現代人から見ると非常に貴重な資料的記録が多く見られる気がいたします。

例えば、帰朝後の諸橋先生の進路を決定づける記事が日記「No.5の七十二～七十五頁」に書かれています。諸橋先生は、大正十年八月十一日に帰朝した直後の八月中に、岩崎小弥太より静嘉堂文庫長を委嘱されます。この文庫長委嘱については、二人の間に内約があったのです。

諸橋先生は、岩崎男爵の中国旅行中、霞山に停泊中の大利丸に会いに行こうとします。しかし、霞山の岩村領事宅で足止めをくらい、乗り遅れた諸橋先生は汽車で鎮江まで追いかけて面会しています。

「鎮江着直ニ日清埠頭ニ至ル船未ダ発セズ真ニ天佑ナリ、乗船後直ニ岩崎男爵ヲ訪ウテ久闊ヲ叙ス、何時モナガラノ温情真ニ痛快ヲ覚エタリ、此ヨリ船中一夜相談ズ、静嘉堂文庫ノコトナドモ相談シ、帰朝ノ後ハ愈々其ニモ従事スルコトトナル、尚支那ノ府県志蒐集ノ依嘱ヲモ受ケタリ」

と、日記に書かれてあります。岩崎小弥太より、静嘉堂文庫長を委嘱される件は六月十一日の夜に大利丸上で決定されていた事が分かります。

合併後、新たに三条市ができた関係で諸橋轍次記念館を三条市が運営する事になりました。第二代館長の羽賀氏と相談を受けた筆者により、諸橋轍次博士記念漢詩大会が開催され、第二回諸橋漢詩大会で審査をして頂いた李冬木先生と、第三回漢詩大会で記念講演をして頂いた吉田富夫先生と、共同研究という形で三菱財団の助成金を受けて研究する事になりました。初代館長の目黒氏が、鄭重に保存されていた資料群を、諸橋轍次博士生誕百三十周年記念の年に、諸橋轍次の基礎研究成果として公開できることに、何らかの奇縁とでも言うべきものを感じます。今後、数多の研究者によって諸橋博士の真の姿が明らかになっていくことを期待したいと思います。

（さとう　わたる・諸橋轍次記念館指導員）

〔研究報告四要旨〕

諸橋轍次博士の絶筆について

佐藤　亙

これまでの絶筆は、諸橋博士の母校の同窓会である茗渓會のために、扇面に書かれた「穆如清風」です。これについては、「大漢和辞典修訂版月報4」（昭和五十九年十月大修館書店）に博士の高弟、鎌田正東京教育大学名誉教授の文章が掲載されていますのでご覧下さい。

◎新発見の絶筆について

諸橋記念館収蔵庫の中から発見された絶筆は、二枚。一枚は五言絶句が、もう一枚は和歌が墨書されています。二枚の寸法は同じで、本紙寸法は縦23.3 cm、横10.2 cmです。

①漢詩五言絶句は次のとおりです。

送驛還迎驛　駅を送り還た駅を迎え
那須問客程　那ぞ須いん客程を問うを
浮雲来去外　浮雲　来去の外
心月照佳城　心月　佳城を照らす
百歳老止軒

【製作年】昭和五十七年（一九八二）百歳の春頃か。また、即興の自作詩と思われます。

【通釈】題は書かれてありません。「驛」を宿駅の比喩としています。一年を送り、また新年を迎えることができた。どうして、残りの人生（の時間）を知る必要があるだろうか。（悠然と）流れゆく浮き雲の向こうでは、清らかな心のように澄み切った月が私の墓を照らしていることだろう。

②和歌は次のとおりです。

梅も見多婦しもさくらも若艸も見多　こ能世の春にもう　残る
於もひなしら

止　軒

【製作年】昭和五十七年（一九八二）百歳の春頃か。

【通釈】偶々口から発した言葉が、歌になった気がします。最後の「ら」字は、新潟県三条市ではよく使われる言い回しで「もう○○だな」という気分の表現に常用されるものです。

梅の花も見たし、藤の花も桜の花も若草も見た。
この世の春に、思い残したものは無いな。

この度発見された、漢詩五言絶句の落款には「百歳老止軒」と書かれてあること、及びその内容から昭和五十七（一九八二）年、百歳の春頃の書作であろうと推定されます。扇面は、対外的にいわば公的に書かれたもの。詩箋二枚は、私的に己の心境を托して書かれたもの。諸橋博士は、昭和五十七年十二月八日に永眠するまで、なお半年を残されているので、新たに絶筆が発見される可能性があることを一言申し添えておきます。

（さとう　わたる・諸橋轍次記念館指導員）

＊諸橋博士の絶筆は口絵写真をご覧ください。

◎諸橋轍次博士生誕百三十周年記念

〔V〕集中講演会

（1）諸橋轍次博士の教育について［内山知也］

（2）『大漢和辞典』出版秘話［鈴木一行］

（3）諸橋博士の隠れた功績

——「袁世凱加筆民國憲法草案」を中心に——［李冬木］

［集中講演会ポスター］

〔講演要旨〕

諸橋轍次博士の教育について

内山知也

皆様、お早うございます。只今ご紹介にあずかりました内山知也でございます。

私は、昭和二十二年に東京文理科大学という学校に入ったんです。私は漢文をやりたいから漢文学科に入ったんです。合格いたしまして、やれ嬉しやと思って大学へ来てみたら、諸橋先生のお名前がないんですよ。先生はもう定年になって辞めておられた。僕はそれを知らないで文理科大学に入ったんです、しまったと思いました。

先生の『大漢和辞典』は皆さんお持ちでしょうか。僕は、一番最初に出た一冊だけの本があります。それからはじまって、全部揃って出たやつ、それから小さくなった本がありますね。それから台湾から出た海賊版、最近立派な大きなのが出ましたね。私の家にはそれだけ大漢和辞典があるんです。

ですから、いっぱい読んでいるだろうとお思いでしょうが、それほど読まないんですよ。特別何か問題があって、調べるときは死にもの狂いになってやりますけれど、そうでないときは、ちゃんと書棚の奥へ入ったままです。

辞典は一揃いあればいいんですけど、あれがみんな直っているんですよ。

私が新潟の高等学校の先生をしているとき、『大漢和辞典』は間違いないですよねと同僚が言うからね、いや間違いもあるはずですよ、僕だって一つ見つけたんだからと言って、諸橋先生にこれ間違いがありますと書き送ったら、諸橋先生がちゃんと印刷した礼状を私の所へ送って

下さいました。

誤りは、次の印刷の時に見事に直りました。『諸橋大漢和』みたいな、あんなべらぼうにでかいのを直すでしょう。如何に良心的だかということが分かりますよ。だけど、直すのはたまったもんじゃない、金がかかってね。本当に一字でも余計に行が増えたら、次次と送りで次の頁に送っていくでしょう。うまくどっかで版組みを調整するわけです。

本当の面白いお話を一つ。先生が、自白して物忘れの話を『諸橋轍次著作集』に書いていらっしゃいます。先輩の兒島献吉郎先生という方が文理大にいらっしゃいまして、梨が好きだという話を聞いたことがあるので、郷里へ帰られた記念に兒島献吉郎先生に持って行くことにした。

ある夜、先生のお宅を訪ねて、御免と言うと、女中が出て来た。早速、そのプレゼントを差し上げてですね、これを先生に差し上げて下さい。私は諸橋ですと名乗って帰ろうとした。ところが、中から奥さんが出てきて、ちょっと待って下さい、失礼ですがどなたでしょうか?と言う。いつも私の顔を見ている奥さんのくせに、なんで私の顔がわからないだろうと思って、兒島先生にお世話になっていますと言って出したんです。すると奥様あー、兒島さんなら宅でなくて隣ですよって。諸橋先生は隣へ行ったのですね。そういう、そそっかしいことをおやりになっていらっしゃる。あるいは、眼が悪くてそうなったのかもしれません。

［講演中の内山知也先生］

先生は大変お子様が好きだったようで、「三孫歌」という詩を詠んでいらっしゃる。先生がお詠みになった「三孫の歌」は、五言詩になっています。これは「止軒詩艸」に出ているのですが、ちょうど今日、お孫さんがお見えになっておられますので、ざっと訓読してみます。

「吾に三小孫有り」、小さな孫がある。「喜戯　放にして奔る」、彼らが遊ぶときはもう好き勝手で、大暴れする。「人は跳躍して閙ぐを厭うも、我は笑語の温かきを喜ぶ」、世間の人は子供達が騒ぐのを嫌がりますけれども、子供達が笑って騒いでいるのはとっても温かくて嬉しい。

「伯は達にして言語を能くし」、ここに今お見えになる達人さん、お話が上手だと言うんですね。大きくなられて、おしゃべりが上手いという事でしょうね。「長喙好んで争論するも、猶長者の質あり。物に接しては恩義敦し」、「長喙」は嘴が長いというのですが、お話がとっても好きで、議論をするのが大変上手い。時々、お爺ちゃん参っていたみたいです。達人さんは、なかなか立派な大人の風格があって、あらゆる物事に関して恩義を重んずると。人から非常に丁寧にしてもらったとか、お父さんや、お母さんから優しくしてもらった事については、その恩義を厚く感じている人です。先生は可愛い可愛いだけではなくて、ちゃんと性質を見ていらっしゃる。

それから二番目の方、仲泰さんでしょうか? 「仲泰　温なること玉の如く、花に灌いで蔬園を楽しむ」、この二番目の方は、非常に安らかな玉のように温かな感じの方であって、花が庭に咲くとそれに水をくれてやる。それから「事を執りて慵いこと甚だしと雖も、木に攀じること早きこと猿に似たり」、ともかく仕事を頼むと一生懸命になってへとへとになるまで、よくやるんだそうですね。しかし、木に登ることになる

というと猿のように早く登るのだと書いてあります。

それから、一番末っ子を季。三番目の恒夫さんと言う方は、「季恒気は雄傑、其の勢い鵬鯤を凌ぐ」と、非常にこの方は元気が良い方ですね。高潔な趣があってその勢い「大鵬」や「鯤」という大魚のように、すごい気力がある方です。「常に四隣の友を会し、自ら牛耳をとりて欣ぶ」、近所の子ども達を集めて、がき大将になって大喜びしている。

という訳で、「三孫　各々長ずるところ有り」、それぞれ優れているところがある。「趨舎また門を殊にする」、色々な所へ行く時も別々、銘々バラバラ好きな所に行っている。それから、たとえ話が出てきます。

「昔　悉達國、聞くに三蔵尊有りと」、悉達國は、昔お釈迦様の時代のインド。三蔵法師をもじってるんだと思いますが、「二悟その闕に跪づき、八戒その垣に額づく」、三蔵法師がありまして、その二人のお坊さんはですね、中をみると真ん中の三蔵尊のところに跪いている、それからもう一人八戒というお弟子は、垣根に額ずいて反省猿みたいな恰好している。

「規箴す我れ汝に誨えん、汝は謹んで我が言を聞け」、この孫三人に私は教えたい事がある。お前たちよ私のいう事をよく聞きなさい。「昭々患うる無きに非らず」、これはご長男の方に言っているのですが、これは、はっきりと心配するというほどのことではなくて、多少心配があるんだ。「達也昏々を守り、寛徐機を失いやすし」あなたは、昏々を守りなさいと言う訳ですね。多少とぼけた格好もなさい、あまり明晰過ぎて鋭いといけませんよ。ということでしょうね。

それぞれに、もっと教訓がその後にあるんですが、時間がきました。性格にいいところがあるけれども、そのことによって、間違った方向へひっかからないように気を付けなさい、ということを丁寧に教えていらっしゃるわけです。そういう丁寧な優しい教えを、お孫さんに残されたのが詩集に載っております。

色々メモを作ったことは作ったのですが、時間がきてしまいましたので、このへんで終わらせていただきます。

（うちやま　ちなり・筑波大学名誉教授）

〔講演要旨〕

『大漢和辞典』出版秘話

鈴木一行

私、大修館書店の代表取締役をしております鈴木一行と申します、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

『大漢和辞典』を刊行いたしました鈴木一平は、私の祖父でございます。私、残念ながら諸橋先生にはお目にかかる機会はなかったのですけれども、祖父の鈴木一平には、しょっちゅう会っておりました。

この『大漢和辞典』が、世に出るまでの大きなエピソードといたしましては、四点あるかなと思っております。

一つはですね、太平洋戦争による紙不足ですね。第一巻だけは戦中に出す事が出来ましたが、その後、紙が有りませんで、紙も配給ということだったようですので、その後が続かなかった。

二番目はですね、昭和二十年二月の大空襲。その時に、鉛版ですね、いわゆる刷り版ですとか、紙型、その他基本的に全部が燃えてしまいました。

三番目はですね、戦後、大漢和を復活させようという事になりまして

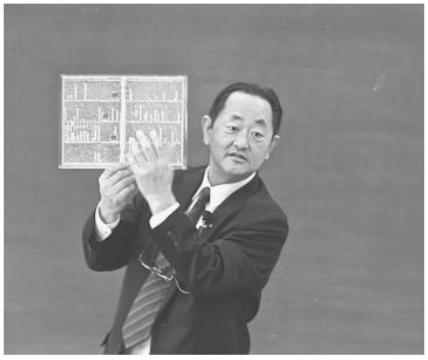
からですね、原価が非常に高騰してきたり、活字を彫る技術者の方がいない。お金だけではなくて、ともかくやってくれる人がいない。

四番目は、私共出版社独特の問題点なんですけど、お金が無くなってきてしまいました。

皆さん御存知だと思いますが、諸橋先生をはじめ、非常に多くの先生方の編集作業が発生いたします。先立つものが、先だって行った後、後からどうしようかということです。

そういった四つの大きな問題を、お蔭さまでお手助けていただきながらクリアしまして、それで刊行ができたということでございます。

さて、第二巻以降の紙が全く回ってこない。紙が無くても編集作業が進み、一方でいわゆる組版作業もずーっと続けておりました。あまり細かい記録はないんですけれども、二巻から十三巻最後まで、実は全部出来ていたそうです。少なくとも木枠へ活字を置いていったとこまでは出来ていた。ところが、米軍が焼夷弾を落としたので、それらが全てパーになりました。



［講演中の鈴木一行先生］

燃えた後ですね、祖父が後で文章として書いているんですけど、非常に諸橋先生に申し訳ないという気持ちと同時に、全て無くなったので清々した。

実は「清々した」ということにはちょっと意味がありまして、色々な産業で合併をして会社を大きくさせようという動きが、戦中の昭和十八・九年位からあったようでして、実は私共もその対象になっていました。ある出版社さんと私共が合併ということになっていたのですね。この話が進みますと、第二巻以降は「〇〇〇の大漢和辞典」ということになります。これは、ちょっと耐えられなかったようですね。「清々した」とはそういう意味です。

その後ですね、大変有難い事に、ゲラ刷りですとか、試し刷りとか校正刷りという言い方でご存じの方多いと思いますが、そのいわゆる「校正刷り」が疎開していた。

幸い、校正刷りを先生が持っていらっしゃった。あとは、我々が何とかしなければならない、出版社サイドとして何とかしなければいけない問題です。これはもう本当に技術革新のお蔭でと言いましょうか、いわゆる活版印刷ではなくて平板印刷というやり方、オフセット印刷、今世の中の主流はこれです。これが出来るようになってきました。

これが、いわゆる写真植字による製版の一つの大きなポイントになりますが、まあ細かくはご覧いただけないと思いますけど、こんな中にズラーッと漢字が入っているんです。下に感光紙を置いて上から光をポンと出す。そうすると、下に文字が写る、その文字を使って版を作るという、こういう技術ですね。これが、オフセット印刷というものなんです。

この利点というのは、コスト面から言いますと、活字の場合はとにかく、あらゆる大きさの活字を一本一本作らなきゃいけないですね。ところが、このやりかたを採りますと、距離を変える事でいくらでも、大きい小さい活字が作れる訳です。従って一個あれば、これが一枚すべての大きさの活字に対応できるという事で、これはいけると。

但し世の中にありませんでしたから、写真植字研究所の石井茂吉さんに、わざわざ字を書いていただきました。先ほど親文字として立っている文字が五万と言いましたが、実は使っている文字が二十三万幾つ。本

文に、この字はここに出てくるという原文を引用しているんですね、原文というのは日本には無い字がものすごくいっぱいありまして、最終的には二十三万幾つかだったと思います。それくらいの字を作らなければ、大漢和辞典は出来ないという事になります。

もう一つの先立つ物の話でございます。他の参考書ですとか、教科書なんかで利益が出ました。その利益を、ほとんど『大漢和辞典』に投入したということは、社内でも有名な話であります。我々は、大修館書店ではなくて、大漢和書店でないかという。どうも、そういうことのようです。本当に、そういう状況のようだったんですけれども、しかしそれでも足らない、なにしろ先立つわけです。

私どものメインバンクは、実は東京都民銀行さんでございます。メガバンクじゃないです。東京都民銀行さんが資金を出してくれた。この銀行のお蔭で『大漢和』を世の中に出すことが出来た。非常に大きなポイントの一つというふうに思っております。

さて、多分皆様は『大漢和辞典』の写植原版というのは、恐らくご覧になった事はないと思います。現役ですので、記念館の皆様にも記念館での展示はまだちょっと待ってて下さいとお話しいたしました。ご覧になった方は、いらっしゃらないと思いますので是非ここでご覧ください。

最後に一言だけ、『大漢和辞典』その索引の十三巻の一番最後に、私の祖父が出版後記ということで書きまして、それが実際載っております。その中でご紹介しておきたいのが一つございます。そのくだりの部分を読ませていただきます。

「最後に一言申し置きたい事がある。戦災によって私の再起を不可能とみて他より出版の交渉があった時、諸橋先生は泰然として動ぜず、この出版は私以外では完成できない事を信じ、その申し出を退けられた。そればかりでは無く、私を鞭撻下され、ついに出版完成にまでこぎつけさせて下さった事に対し、心から感謝申し上げている」。

私の祖父の出版後記の中の言葉でございます。本当に諸橋先生にはお世話になりましたし、今でもお世話になっております事を最後に申し上げまして、私の拙い話とさせていただきます。

（すずき　かずゆき・大修館書店代表取締役）

〔講演要旨〕

諸橋博士の隠れた功績
―「袁世凱加筆民國憲法草案」を中心に―

李冬木

『儒林墨跡』の中に、袁世凱（一八五九―一九一六）の墨跡があります。「袁世凱加筆民國憲法草案」です。これはこれまで公開されてこなかった資料で、今日が初めての披露になります。

結論を先に述べるならば、これは清王朝の終末と中華民国の成立に深く関わっている歴史的な資料です。袁世凱や中国憲法史の研究、ひいては清末民初の歴史研究にとって重要な意義を備えていると言えます。

この憲法草案について、袁世凱はこの草案の中に自身の意見を書き加えています。さらに彼は、別紙に墨跡を残しています。この歴史文書の解読にあたって、明らかに二つのキーワードがあります。一つは「袁世凱」、もう一つは「憲法」です。

「民国憲法草案」の原稿の筆跡は比較的明確ですが、袁世凱が加筆した場所は、いくらか雑然としているのが目立ち、とても判読しづらいのです。吉田富夫先生、諸橋記念館の佐藤さん、南京大学漢籍整理専門家

の卞東波さん、上海書道家の助力の下、墨跡原文の筆跡を以下のように判読しました。

〔傍線部は、袁世凱の加筆〕

清皇與大総統交際之禮節

一　清皇承襲、由大総統率國會慶賀。

二　大総統就職、由清皇賀加冕。

三　清皇應行文総統時、由宮内大臣具文行知。総統秘書官轉達。移大総統文件曰咨。

四　大総統應行文清皇時、咨行宮内大臣轉陳。移清皇文件仍曰奏。

五　総統及議員見清皇曰覲。

六　王公襲爵仍用清皇冊寶。

七　對於外藩之事件、清皇委任大総統行之。首列清皇名號。

［李冬木先生の講演風景］

清皇之權限。

一　清皇世世相承。

二　清皇神聖不可侵犯。

三　清皇對於各種宗教有表障之義。

四　皇室經費由國會製定、不得議減。

五　皇室原有之財產及王公世爵各仍其舊。

六　八旗原有口粮、暫仍其舊、俟生計籌妥後、其從前營業之限制、居住之限制、一律蠲除、與漢民平等。

大総統之權限　憲法

一　大総統由國民投票公舉。

二　大総統任期以法律規定之。

三　大総統以國民之委任、有外交、内政、軍事之專權。

吉田富夫先生のご助力をいただいて、私は上記の判読結果を日本語訳してみました。

【訳文】

清朝皇帝と大総統の交際の礼節

一．皇帝皇位継承の際、大総統は国会を代表して祝賀する。

二．大総統就任の際、皇帝は就任式を祝賀する。

三．皇帝が大総統に文書を遣わす際は、宮内大臣が起草・転達する。大総統秘書官経由とする。大総統に遣わされる文書は諮と呼ぶ。

四．大総統が皇帝に文書を提出する際は、宮内大臣経由で行う。皇帝に提出する文書は奏と呼ぶ。

五．大総統および議員が皇帝に面会することは覲と呼ぶ。

六．王公の爵位冊封は従来どおり皇帝の冊寶による。

七．藩部関係の事は、皇帝が大総統に委任してこれを行う。頭書に皇帝の名号を記す。

清朝皇帝の権限

一．皇帝は世世継承する。

二．皇帝は神聖にして、これを侵してはならない。

三. 皇帝は各種宗教に対して表彰を行う義務を有する。
四. 皇室の経費は国会より定め、減少を議することを許さない。
五. 皇室の原有財産および王公世爵は従来通りとする。
六. 八旗の従来の扶持はしばらく旧来通りとするが、その生計安定を待って、従来の営業制限、居住制限は一切廃除し、漢民族と平等とする。

大総統の権限　　憲法

一. 大総統は国民投票により選挙する。
二. 大総統の任期は法律より定める。
三. 大総統は国民の委任を受け、外交・内政・軍事の専権を有する。

上記の読解から、『民国憲法草案』は三つの部分から構成されていることが分かります。すなわち、

（一）清朝皇帝と大総統の交際の礼節
（二）清朝皇帝の権限
（三）大総統の権限

もし、これを「憲法」というならば、その内容はいささか単純です。あるいは憲法草案にはこの他の部分が、なお存在するのかもしれませんが、現在私達には知りようがありません。もし、これが「憲法草案」の全てならば（私個人の判断ですが、可能性は比較的大きいと思っています）、「憲法草案」というよりも、憲法草案の〈綱要〉といった方がより的確です。

この綱要の内容の比重から見て、三分の二の内容が清朝皇帝に関わる内容であり、主に清朝皇帝の地位と待遇の問題、および貴族と八旗の地位と待遇の問題であり、残りの三分の一は大総統の権限です。大総統の権限は、大総統選挙と任期と権限範囲、この三つに関っており、ここから袁世凱が憲法制定時に直面した問題そのものを推測することができます。

袁世凱が、直面した最大の問題は、中華民国は清朝皇帝をどのように扱うかという問題です。その次は、中華民国成立後の総統の権限問題です。この二つは、彼が当時最も関心をもち、解決しなければいけない問題でした。

私が先程、なぜこれが憲法綱要の中のある一つの部分ではなく、一つの完全な憲法綱要であろうと言ったのは、草案の最後の一文が理由です。

張琴、號治如、福建浦田人、翰林院編修、現住西城仙遊會館。順天高等學堂國文教員。

【訳文】

張琴、号は治如。福建浦田の人、翰林院編集、今西城仙遊会館に住む。順天高等学堂国文教員。

張琴がこの草案の起草者ということは明らかであり、自身の名前と身分が最後に記してあります。

最も難読であったところは、袁世凱が別紙に書いた赤い枠中の字です。上海の書道家の最終的な識別を経て、以下のように判読しました。

慰勉給假一月駁斥
公擧

另無重枴（？）督速籌
覆

【訳文】

勉励のため休暇一箇月を与える。
公選を斥けよ。
別用件は無い。重枴（？）は速やかに解決を計りて、
返答せよ。

このメモは内容上、前述した草案とどういう関係にあるか、未だに結論を出すにいたっていません。しかし、言葉に限ってもうしあげるならば、『草案』と袁世凱のメモの両者に「公挙」という二文字があり、「草案」の中には「大総統由國民投票公舉」の文字があり、袁世凱の墨跡の中には「慰勉給假一月、駁斥公舉（勉励のため休暇一箇月を与える。公選を斥けよ）」があります。もし両者が内容的に関係があるならば、袁世凱が国民選挙で大総統を選ぶことに反対していたことが明らかです。この問題は、さらに一層の考証と研究が待たれます。

草案の起草者、張琴については現在ほとんど知られていません。近代史、ないし袁世凱研究の専門家でさえこの人物を知りません。関連する資料はほとんどありません。

張憲章編集『反袁社論選輯』（一九八六）は、今日に袁世凱と戦う者のイメージを残しましたが、諸橋轍次が保存したこの「民国憲法草案」は、まさに袁世凱が帝政を復辟する以前、幅広い支持を受けたということを物語っています。張琴のような人でさえ袁世凱のために助言をするぐらいです。

諸橋轍次が、「袁世凱加筆民国憲法草案」をどのようにして手に入れたか、現在まだ判定は困難です。ひょっとして、どこかで購入したものであるかもしれません。しかし、彼と張琴が北京で出会った可能性も排除できません。大正七（一九一八）年五月に、諸橋轍次が第一回目の中国を訪問した時、張琴は国会議員として北京にいたと見られるからです。

この度、色々な資料に目を通しまして、ますます諸橋轍次が保存した「袁世凱加筆民國憲法草案」は大きな歴史的意味を持っていると感じており、これを完全に解読するにはまだ時間が必要であると思います。

ご清聴、有難うございました。

（り　とうぼく・佛教大学教授）

〔Ⅵ〕諸橋轍次博士追想

（1）祖父の思い出［諸橋達人］
（2）〔対談要旨〕「行不由径」
諸橋轍次先生◇石井裕子氏

〔追想〕

祖父の思い出

諸橋達人

皆様こんにちは、私は諸橋轍次の孫で諸橋達人と申します。新装なった記念館でお話ができることを非常に光栄に思いますし、このように記念館を育てて下さった旧下田村の方たち、それから三条市の方たちに感謝申し上げたいと思います。

私は、大東亞戦争の始まる数ヶ月前の昭和十六年七月に生まれました。奇しくも祖父は明治十六年生まれでして、同じ十六年ということで何か因縁めいたものを感じます。昭和三十四年まで十八年間、東京の新宿区で祖父と一緒に暮らしていました。

また、昭和二十三年、小学校の一年生から中学校の二年生まで、夏休みに祖父と一緒にこの庭月に来ていました。従いまして、話の前半は東京での祖父の話、後半は庭月での祖父の話を六十年前の思い出も含めましてお話をしたいと思います。

まず、東京での話です。私は昭和十六年の生まれですから、戦時中は

●対談●

行不由径

諸橋轍次先生　社長・石井裕子

［対談初出誌『社内報 一九七三年 新年号』（写研）の表紙］

三歳か四歳だったわけです。ですから、そんなに沢山思い出はありません。東京では大体皆そうだったんですが、庭の隅に防空壕を掘って空襲警報が発令されると皆でそこに入っていました。それから、火の粉を防ぐために防空頭巾に水を掛けるわけですが真冬の寒い時など冷たくて嫌だなというのを覚えています。

当時の私は、勿論記憶はないんですが、敵のB29が味方の対空砲火攻撃によって真っ赤に燃えて、どこか遠くの方に落ちたというような話を祖父から聞いております。また、味方の戦闘機がB29に体当たりをして、その血と肉の付いた破片が家の屋根にコトンと落ちて来たということで、線香を立てて拝んだということです。

祖父は大変勉強家でして、家に居るときは一日に何時間かは書斎に閉じこもって勉強していました。祖父は勉強が苦にならなかったように思います。普通の人ですと、勉強というのは「嫌なのを強いて勉めるから勉強だ」と感じるわけですが、祖父は、そういう感覚では無かったようです。

［講演中の諸橋達人先生］

天気の良い日は、廊下で「字の稽古」をしておりました。紙と墨を使って稽古をするのではなく洗面器に水を沢山汲みまして、それを筆につけて廊下の板の間で字の稽古をするわけです。こちらは子供ですから、何か悪戯書きでもしているのかと思って「あー楽しそうだな」と思っていましたが、祖父なりにちゃんと字の稽古だったようです。

また、廊下を歩きながら漢詩をよく口ずさんでいました。古来の有名な詩なのか、自分で作った詩なのかは判りませんでした。冬は当然、足袋を履いているわけです。その足袋の小鉤（こはぜ）が外れて廊下を歩くとカチャリカチャリと鳴るんですが、そんなことは全然気にもせず漢詩に没頭していました。

家に居る時や、近くを散歩する時はほとんど着物で、家での食事の時なども着物を着てきちんと正坐をしていました。

祖父が、生涯をかけた大事業の『大漢和辞典』に関しましては、私が物心つきました時には既に完成の段階にありましたので、あまり記憶に残っている事はありません。ただ、編纂に協力して下さった大勢の方の中に四名、祖父の高弟が居られました。私はこの方々を、丁度、源頼光の四天王になぞらえて諸橋四天王というふうに呼んでいました。

祖父は、酒は毎日飲んでいましたが量は盃に三杯程度です。当時は勿論、電子レンジという便利な物はありませんから薬缶か鍋に水を入れて、それに徳利を入れて温めて燗をするわけですが、たかだか盃三杯の酒ですから徳利が転んでしまう訳です。「仕方がないから、燗がつくまで手で押さえていた」と、私の母がよく笑いながら話していました。祖父は、百歳まで長生きしたわけですから、まさに酒は百薬の長だと思います。

煙草は、ほとんど吸わなかったようです。時々、応接間の煙草入れの中に、菊のご紋章の付いた恩賜の煙草が置いてあったのを記憶しています。これは「朝日」ではなかったかなと思います。酒、煙草はそれぐらいですが甘いものは大変好きでした。晩年、私の家内が、お彼岸におはぎを作って持って行くという時は、朝から何も食べずに待っていまして大きいおはぎを幾つも食べた事があります。

冬は火鉢に当ったり炬燵に入ったりしながら、私を含めて三人の孫達に色々な話をしてくれました。「西遊記」「里見八犬伝」「川中島の合戦」など、そういうような話でした。祖父自身、「西遊記」が一番好きだったせいか内容も充実しておりましたし、これが一番面白かったと思います。

火鉢に当っている時は、炭火の起こし方を教わりました。これは、皆さんもご経験があると思いますが炭火を起こす時は一つコツがあります。ただ、力いっぱいフーッと吹くだけでは、まわりの灰が飛び散って灰神楽になるだけで火は起きません。口をすぼめて、丁度、口笛を吹くような格好にして炭の一点を狙って息を吹きつける、そうすると火は起きて来る。要するに火吹き竹の原理と同じような事です。こんな事を火鉢に当りながら習いました。

さて、「西遊記」の話がだんだん進んでいくうちに、家の人たちを物語の中の人物に喩えたらいいんじゃないか、という話になりました。勿論祖父が三蔵法師です。孫が三人いましたので、一番上の私が孫悟空。次の弟が猪八戒。三番目の弟が沙悟浄ということになりました。敷地内に在りました遠人村舎。今は、こちらに移築されておりますが、その遠人村舎に二人男性が住んでおりましたので、それぞれ金角大王、銀角大王というふうに命名しました。

この銀角という渾名は、非常に有名になり、私の家の者だけでなく、親戚や母の実家の人達まで「銀角、銀角」と本名よりもずっと有名になり、今でもその銀角の呼び名が通用しています。そのほか、誰をどの役に当てたか忘れてしまいましたが、庭へ出て空の雲を眺めながら「あれに乗って空を飛べたらいいな」と思っていました。今も、この諸橋記念館では三蔵法師の一行が天竺を目指して旅をしております。感無量の思いが致します。

祖父の歌というのは、たった一度だけ聞いた事があります。親戚一同が集まった正月だったと思いますが、その席上で歌った歌です。ご存知の方も多いと思いますが、「青葉茂れる桜井の里のわたりの夕まぐれ～」という楠木正成、正行の訣別の歌ですね。何番まで歌ったかは忘れてしまいました。

祖父が子供の頃、授業で聞いたというこんな面白い話をしてくれました。ある先生が「大は小を兼ねる」と言ったところ、生徒に「それでは、杓文字（しゃもじ）で耳が掻けますか？　長持ち枕になりますか？」と問い詰められて「言われて先生唖然たり」という、なにか先生をやり込めたような話をしてくれたことがあります。

晩年は目が悪くなりまして、殆んど視力が無い時期がありました。外出の時は白く塗ったステッキを使っていました。白い杖というのが、その頃の目の不自由な人の合図になっていました。外では当然、電車に乗るわけですが今のようにエレベーターとかエスカレーターとか、ああいう便利なものはありませんでした。当然階段を歩くわけです。上りはともかく下りで、もし足を踏み外したら大変だということで駅の階段を全部勘定したそうです。そして、何駅は何段、この駅は何段という事を全部覚えて駅の階段を上り下りしたということです。その後、手術をしまして幸い片方の目は視力を回復しました。

祖父は基本的に真面目で、あまり冗談などは言わない人でしたが意外にユーモアを持っていた面もありました。東京の青山学院という大学で女学生に漢文を教えていたことがあります。先生ですから、生徒を名指して教科書を読ませるわけです。大体の先生は、席順や名簿順で順番を決めるわけですが、祖父は生徒に判らない法則で名指しをしたことがあるそうです。これは、生徒も見抜けませんでした。答えは洋服の色です。男子生徒は大体制服を着て皆同じですけれども、女子は色とりどり

の服を着ている人が多かったので、その中で赤い服を着た生徒を名指したということです。

私が高校の時、風邪を引いて何日か休んだことがあります。その学校は戦前、学校の制度が五年制だった時に、祖父が教鞭をとったことがある学校で、祖父を知っている先生も沢山居られました。私が風邪を治して学校へ出ましたところ、ある先生が「鬼の霍乱である、お祖父さんにそう言って書いてもらってきなさい」というわけです。私は辞書で調べて「鬼の霍乱とは、普段丈夫な人が珍しく病気になること」と紙に書いて、翌日先生にお渡ししました。先生は「その通りである。私の言ったのは「鬼の霍乱」をお祖父さんに書いてもらってきなさいということだ。貴方の字が欲しいのではない」。要するにその先生は、祖父の書いた字が欲しかったということなんです。勿論、祖父に頼みまして後日その先生に差し上げました。

祖父に、大きな声で叱られた事はありません。ただ、物の扱いは大切にせよと、よく言われました。食器類なども取り扱いを丁寧に、用心深くということでした。

ということで、東京の話はこの位に致しまして、この辺で庭月の話に移りたいと思います。

祖父は、毎年庭月に帰ることを非常に楽しみにしていました。「庭月に行く」のではなくて、「庭月に帰る」のです。私が初めて庭月に参りましたのは、小学校の一年、昭和二十三年ですから今から六十四年前になります。その頃をチョッと思い浮かべて見て下さい。まだ、生まれてない方もおられるかも分かりませんが思い出して下さい。

当時は、今のように新幹線がありませんから、まず上野から上越線で参ります。今は新幹線で二時間弱で来るわけですが、当時は東三条まで来るのに五時間か七時間かチョッと忘れましたけれど、だいぶ時間がかかりました。夏休みですから当然暑いわけで、もちろん汽車には当時冷房なんて効いてませんから窓はむろん開け放しです。

それで途中どこかの駅で、アイスクリームを買って食べた事があります。そのアイスクリームの売り子は「アイスクリーム」とは言わないで「アイスクリーン」と言っていました。器にもちゃんとアイスクリーンと書いてありました。

東三条からは、バスで来るわけです。降りる停留所は今の記念館の入口より、だいぶ八木よりになっていました。ただ運転手さんに頼んで、記念館の入口になっている辺で停めてもらったことも何度かあります。今ですと、規則がどうだとか堅苦しいことになると思いますが、その頃は乗る方も運転する方も大らかだったんだなと思っています。

当時ここは、新潟県南蒲原郡森町村大字庭月というところでした。この生家の裏に井戸がありました。当時、生家には親戚の人たちが何人か住んでいたんですが、その人たちはみんな井戸から汲んだ冷たい水を飲んでいました。

私は、それを一旦薬缶で沸かして湯冷ましにして、その不味い水を飲んでいたんです。ある時、あんまり喉が渇いたんで井戸水を一気にガーッと飲んだんです。すぐ下痢をしてしまいました。ところが一回下痢をして慣れてしまうと、もう大丈夫になりまして、そのあとは井戸水を直接飲んでも何の問題もありませんでした。

水の話ですが、八木の橋の向こうに非常に冷たい清水が湧いていました。祖父は、毎朝早く起きて散歩かたがたその清水を飲みに行きました。私も何度か一緒に行って清水を飲みました。非常に冷たくて美味しい清水でした。また、道も今のように車が沢山通っていませんで散歩は非常に快適でした。

本日、お見えになっています早川さんの家、これは上の家といってましたけれどそこにも清水がありまして、時々西瓜だとか野菜だとかが冷やしてありました。上の家にも時々、使いを命じられて行きました。この生家から、そこに行くには三つの道があります。一番遠いけれど一番安全なのが、一旦バス通りへ出て八木の方へ行ってそれから右の方へ上がる道。その次が、記念館の裏を通って畑のあいだを行く道。そして、一番早いのが生家の下の崖を下って田んぼの横を通る道です。

だんだん、庭月に慣れてきますと遠い道は面倒になり、時間節約の為に最短の道を使いました。使いましたけれども、田んぼの畦を行くわけですから蛙が足に飛びついたり、近くを蛇が這っていたりしてビックリさせられました。いつでしたか、卵を幾つか持って歩いて行った時に近くを蛇がニョロニョロッと動いたので、こりゃ卵を取られるんじゃないかと思わず大きな声を上げたことがあります。近くで畑仕事をしていた人が「どうしたんだ！」と言って駆けつけてくれました。

当時は、通称とか屋号で家を呼んでいたことが多かったように思います。先程の上の家というのもそうですが、職業とか先代の名前とか、現在の当主の名前などで呼んでいたように覚えています。荒沢の方に海軍さんというのがありまして、この家は何で海軍さんというのか聞いたところ戦時中海軍の軍人だったからという話を聞いたことがあります。

生家から、バス通りに出る途中に小さな川があります。堰といってました。今、どうなっているか見てきませんでしたけれど小さな川がありました。そこで釣りをした事があります。庭月に、来たばかりの頃はなかなか川で魚が見つからないんです。見えないんですね、泳いでいるのが。底と同じような色をした魚ですので、そこに魚がいるかどうか分からない。これも庭月に来てしばらく見ていると、だんだん慣れてきて魚が泳いでいるのが分かるようになりました。近所の人に聞きましたら、雨で水が濁っている時によく釣れるんだという話でした。

昼飯を食べ終わって少し休むと、私達子供は皆んな六尺褌をしめて風呂の水汲みをやります。もちろん、風呂が沸くと一番に祖父が入るわけです。その頃、子供たちは水中メガネとヤスを持って大川（五十嵐川）に行っています。それからの数時間が、我々子供たちにとって一番楽しい時間でした。

川では、初めに浅瀬でカジカをヤスで突きます。大きな石の川下に立って、石をそっと持ち上げると川底にカジカがへばり付いている。呼吸を計って、ヤスをサッと突く訳です。初めはなかなか突けませんでしたが、慣れてくるともう百発百中でカジカが突けるようになりました。このカジカ突きは、やった事がない方は分からないかもしれませんが石を上げて、カジカがいるかいないかというのが非常にわくわくするんですね。この気持ちが何とも言えない気持でした。

カジカ突きが終わると泳ぎ始めます。ちょうど、川が蛇行して流れが緩やかになったところが格好の水泳場所です。向こう岸の方が崖になっていまして、そこは非常に深く飛びこんでもなかなか底に着きませんでした。何か薄暗くて、川の主が住んでいるんじゃないかと思うような場所でした。小学校の頃は犬掻きで泳ぎましたが、中学校になると学校で習った水戸藩の水府流という泳法で泳ぎました。これは数年前に聞いた話ですが、今の学校の生徒は川でなくプールでしか泳げないということです。非常に可哀そうなことですね。あの川の水泳の楽しさが、分からないんじゃないかと思います。

夕方、特に雨上がりの時なんかは日暮らしが鳴き始めます。家の周りを、東京では見られないような大きな鬼ヤンマがぐるぐると飛びます。非常に厄介だったのがブトです。関東ではブヨといいます。雨の降りそうな暗い夕方ですと、これが出没します。その頃は、もちろん冷房設備

がありませんから戸や窓は開け放しです。しょっちゅう刺されました。初めは刺されると赤く腫れて痛みました。これを、こちらでは「ブトに負ける」という言い方をしていました。現在はブトの話など全然聞きません。

祖父は、二階の座敷で時々漢詩を作っていました。それを端書に書いて友達に送っていました。お盆、こちらは八月十五日でしたね。お盆の二三日前になると、子どもたちが総出でお墓の掃除に行きます。周りの草を取り払って水を撒きます。そして、お盆のお墓参りということになります。

まあ、今から六十年前の話で、まさに隔世の感があると思います。今から三十数年前に、祖父を頂点として集まる会「庭月会（ていげつかい）」が発足しました。この会、今は祖父は居りませんがここ庭月で毎年開催されています。

ということで、私の話を終わります。長時間どうも有り難うございました。

【この講演録は、平成二十四年六月三日に、諸橋轍次記念館　博士の日　リニューアル記念講演会「祖父　諸橋轍次を語る」を再構成し、諸橋達人氏のご厚意のもと掲載させていただきました。】

〔対談要旨〕

対談　「行不由径」

諸橋轍次先生◇石井裕子氏

●「よく立つるものは抜けず」

諸橋　「よく立つるものは抜けず」といいますが、旗竿などよく立てられたものは抜けにくいわけです。これは老子のことばですが、このあとのことばとして「よく抱くものは脱せず」といいまして、抱くものがしっかりしていると脱しないのです。

立てるものとそれを受けつぐのとどちらが難しいかということですが、唐の太宗が家来を集めて「創業が難しいか守成が難しいか」を尋ねたところ、創業に従事した人は創業が難しいと答え守成に従事した人は守成の方が難しいと答えました。創業も守成もいずれも難しいわけです。

写研はこれからが守成のときで、難しいこともあるでしょうが、基礎がしっかりしているし、あなたもいらっしゃるので、何も申し上げることはありません、ただ、志を継ぐ、業を受けるというのが親孝行の最上とされていますので、いつもこのお気持ちを忘れずにやっていただきたいと思います。

ところで社員はいま何人位いらっしゃいますか。

石井　千百人に欠けるぐらいです。

諸橋　そうですか。それは大変でしょうね。仕事というのは一人だけではできません。これも昔のことばですが「衆思を集めるものは力をな

し易し」といいますし、また「己の知を専らにするものは功をなし難し」ともいいます。ですから大勢の方から意見を聞くことは必要です。もちろん、そうはしていらっしゃると思いますが。

石井　昔も今も同じということですね。

諸橋　そうです。同じですね。そうかと言って自分の定見なしに意見を聞いていたのでは駄目ですね。これも例えことばですが、「道端に家を建てる」ということばがあります。これは道端に家を作っていると、道を歩いてくる人が勝手な批評をして「こちらに窓を作った方がいい」とか「湯殿はこちらの方がよい」とか言うので、それをいちいち聞いていたのでは家が建たなくなってしまいます。支那の古い詩に「室を築くのに道において計る」というのがありますが、結局家が出来ないというのです。これを救うのはやはり見識でしょうね。ですから大勢の意見を聞くことはもちろん必要ですが、自分の見識がなければ、それが何にもならないことになる。「旧見を洗い去って新意を来す」これをやっていかなければならない。写研が発展していく為にはますます必要なことです。

実際に仕事をしている社員の人たちに希望したいのは「どんなに小さいことでもそれを謹んでやる」ということです。「事をとって敬しむ」ということです。私が思うのに世の中に近頃事件が多いのは、どこか人間の心に油断があるのではないかという気がします。堤防が崩れるのはそれなりに原因があるわけで、飛行機などは一つのネジが原因で落ちるんですね。こんなことはなんでもないと思っているところに油断があって、必ずそこから大きな失敗が起るのです。小さなことにも一人一人が注意をする最近の学生の文字の書き方一つをとって見ましても滅茶苦茶で、このこと自体はたいしたことじゃなくても、それが積ってゆくと何かの抜かりが出てくるこういうことを許すようなことが続いていると、これが大きな危害につながるのではないかと考えています。

それに仕事を急ぐ、功を急ぐということがどこにおいても見られます。

政治家もそうだし、例えば大臣は自分の任期の間のことだけ考えるし、県知事なども同じようなもので、こういう考えでやっているからどうも本当のものができないのです。「速やかならんと欲すること勿かれ」。急いで何かやろうとするから、本物ができない。彫刻家の平櫛田中という人が述懐している話の中に若い頃彫刻をやっていたが、さっぱり売れない。そこで岡倉天心のところへ行って、相談したところ岡倉天心が言ったそうです。「売れるものを作ろうとするからいけない。売れないものを作ることを考えなさい」と言われた。そこで、本人が考えを改めた。ちょうどご尊父がやっていらっしゃったように、自分の為に仕事をする。自分の納得のゆく、自分で誇りをもてる仕事をするということでやっていれば仕事は一時は遅くなるかもしれない。けれども仕事に抜かりは生じない。本当のものができる。

こういう考えを社員の方全員に望むのは無理かも知れませんが、こういう考えが基礎になければ本当の発展はできないということを念頭において、写研はやってほしいとこう願います。

●「万里の長城を築く心」

石井　はい、ありがとうございます。先生が『大漢和辞典』を編纂をされるにあたってどういうお考え、どういうご計画でおすすめになったのか、お伺いしたいのですが。

諸橋　最初はほんの小さな辞引を考えていましてね。二冊ぐらいのつもりだったのですがやっている中に、何か漢字に役立つものをということになったわけです。考え方としては、時勢にだけ適合しようとしてや

るのでは、本物はできない。それに価値がすぐ変化してしまう。そいうものよりは、いつまでも変らないものがいい。それは辞引であるということで本格的に始めました。

やり始めてからは「売れなくてもいい」と考えに徹してやりました。あれをやっているときは、今よりはずっと漢字廃止論の盛んなときで、漢字がどうなるかはわらない時分でしたが、私は、八億以上もの人間が現在使っている。そしてそれが何千年もの間使われて来たのですから、無くなってしまうわけはないと信じていました。ですから、今すぐ用いられなくても、いつかはきっと役に立つだろうと確信していました。ひところは、出版は出来ないだろうと本当に思っていましたが、その反面、バカに呑気で、きっと何とかなるとも思っていました。

本当をいうと、もう少し手を入れたかったのですが、時世が許しませんでしたし、あのとき出版しなければ、本当に出版できなくなってしまいそうでもありました。

〔対談中の諸橋轍次博士と石井裕子社長〕

石井　戦争前に原稿はほとんどまとめていらっしゃったわけですね。

諸橋　ええ、ほとんど出来ていました。しかし、それから何度も手を入れて、直しました。あの本は、本当におたくが無ければ出来ませんでした。昔は木版を彫ってそれを活字にしたわけです。全部で5万の活字を大修館が作って、組み置いたのですから、大修館も大変でした。それが戦災で全部焼けてしまったのですから。それを初めからやるとすると木版を彫り、字母をおこすところからやらなければいけない。これはとても出来ません。大体、戦後は木版を彫る人も居なければ、字を書く人もいない。こういう状態でしたから、あの本はご先代がおいでにならなかったら、陽の目を見なかった、これは確かです。

大体、仕事というのは大勢でかかれば出来るかというとそうでもないのです。私は万里の長城を見たときにそう思いました。万里の長城というのは、日本の里で五百里以上も続いているのですが、実際にそばに行ってよく見ると、全部焼き瓦で出来ています。それを一つずつ積み上げてあるわけです。瓦を作ること、それを運ぶことだけとれば誰にでも出来ることです。誰にでもできるから、じゃあ万里の長城が誰にでも作れるかというと、それは秦の始皇帝でなければできません。もちろん衆思は集めなければいけませんが、最後は一人の意志がなければやってはいけません。その意味で写研にとって、現在社長は掛けがえがないのですから、そのおつもりで仕事をされることが必要です。

石井　お話は伺っていますと、万里の長城を築くことと先生が辞典をお作りになるのは全く同じだということですね。

諸橋　本当にそうですね。私は万里の長城に行って見て、本当にそう感じました。誰にでもできることだけれど、誰にでもできることではない。あなたもこういうお考えで仕事をおやりになれば、視野が広くなります。

石井　先生は中国へは何度くらいお行きになったのですか。

諸橋　私は中国には二年間留学していましたし、中国は好きですから十回も行っています。

石井　先生は中国のどういうところがお好きなのですか。

諸橋　誰でもいうことですが、おおらかなところですかナ。そこはわれわれとは違いますね。

石井　その中国人のおおらかさというのはどこから来ているのでしょう。広大な土地という環境がもたらしたものなのでしょうか。

●「行くに小径によらず」

石井　ところで最近はどのような生活を毎日お過しですか。

諸橋　朝は八時に起き、食事をして、それから二時間くらい自分の好きな本を読みます。読み方も違って、一句読んでは自分の経験を照らして考え、わからないところはわからないとして飛ばして読むというような読み方です。少し遅くなって昼食をすませて、お客様が見えなければ二～三時間昼寝をします。そして風呂に入って、夕食を食べて、また一～二時間本を読むというような生活です。

石井　先生は今度講談社から『中国の格言』という本をお出しになりましたが。

諸橋　午前中の時間をかけて八年間かかりました。口述筆記したものですが、私が楽しんで読んだものと集めたものです。論語は論語、孟子は孟子というふうにまとめてありますが、政治、倫理などという分類もしてあるので、読み易いと思います。解釈などもあまりこだわらないで、自分の経験と照らし合わせながら読んでいただきたいと思います。

先程、私の人生観をというお話もありましたが、それに近いものに論語の中の「行くに小径によらず」ということばがあります。言いかえれば大道を歩けということです。私は学問の研究の場合でも、人生に処する場合も一番多く影響を受けています。ちょっと考えると小径の方が早いし、景色もいい。しかし行き止りがある。大道は遠まわりに見えても、決して迷わない。この一句が私の考え方の基本になっているといえるでしょうね。

●「欲を少なく、無理をしない」

石井　最後に先生の健康法についてお聞きしたいのですが。

諸橋　健康法といえるほどのものはありませんが、昔から若干心を用いているのは欲を少なくするということです。金銭欲、名誉欲、それに本来あまり縁がなかった権勢欲などをできるだけ押えるようにすることです。

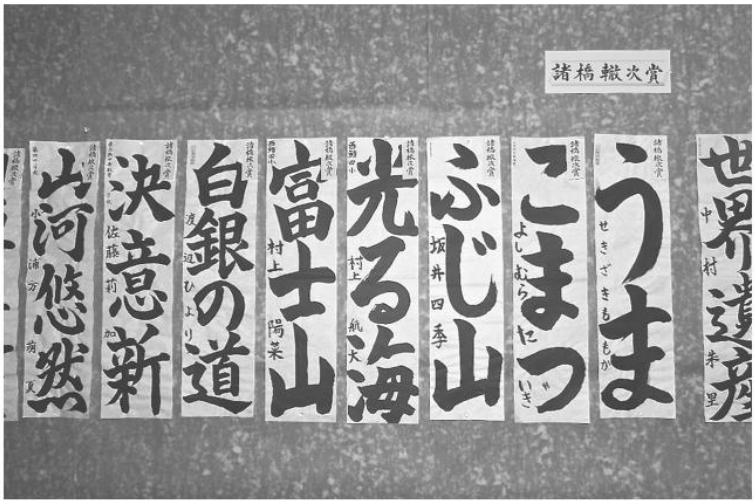
今となっても押え難い欲は食欲ですね。ご馳走を出されるとつい食べすぎてしまいます。もっともこれもだんだん少なくなってはいます。それと無理をしないことでしょうね。いまは一切の公職についていませんので、無理をする必要はだんだんなくなって来ましたが、それでも義理の上で断わりにくいものもあります。ですから義理を欠くことを勇気をもってやらなければいけないと思っています。

そうでもしなければこの身体でいままではもちません。若い頃は身体が弱くて、毎日薬を飲んでいましたし、脚気で二カ月、チフスで三カ月、肺炎で三カ月、肋膜で二度も転地をしたような状態でしたが、どういうわけか六十五ぐらいから安定してきました。今年はちょっと脚の具合は悪くて、これは死ぬのかしらんなんて考えましたが、おかげで助かりました。

石井　本日はありがとうございました。

【この対談録は、（株）写研　代表取締役社長石井裕子様のご厚意により「社内報　一九七三年　新年号」より抄録させて頂きました。】

◎諸橋轍次博士生誕百三十周年記念
〔Ⅶ〕書き初め大会報告
同大会入賞者



［書き初め大会の作品］

平成二十六年一月に、第十五回諸橋轍次記念館書初め大会が開催され、八百四十九点（招待作家三十点を含む）の力作が集まりました。野中吟雪先生（新潟大学名誉教授、岐阜女子大学教授）による厳正な審査がおこなわれ、受賞作品が決定。二月十五日の表彰式には、各部門の特選以上の受賞者四十五名が参加しました。

野中先生は「下田の地は諸橋先生が出られたところ。その記念館が主催する書初め大会で受賞されたことに誇りを持ち、毎回字を書くときには心を込め、美しい字を書いてください。」と講評し、表彰式は終了しました。

作品は小・中学生の部が一階多目的ホールに、高校生・一般の部が二階研修室に展示され、おじいちゃんおばあちゃんに自分の作品を教える児童や、作品の前で写真を撮る家族もあり、賑わいをみせました。

◎最優秀賞・諸橋轍次賞

小学校一年の部　関崎桃夏
小学校二年の部　吉村太輝
小学校三年の部　坂井四季
小学校四年の部　村上航大
小学校五年の部　村上陽菜
小学校六年の部　渡辺ひより
中学校一年の部　佐藤莉加
中学校二年の部　小浦方萌夏
中学校三年の部　神林結花
高校生の部　高橋ひとみ
一般の部　坂井霞光

［書き初め大会表彰式］

【広告協賛各位】（敬称略）

株式会社大修館書店、株式会社コロナ、外山産業株式会社、
株式会社ビップ、株式会社コメリ、北越紀州製紙株式会社、
パール金属株式会社、株式会社丸正土木、いい湯らてい、
株式会社朝日土建、株式会社早川組、株式会社吉田組、
鈴喜建設株式会社、有限会社エムズグラフィック、
有限会社チャイナネットワーク、嵐北産業株式会社、
長禅寺、早川蓁之助、三条商工会議所、今井正子、
小池マサイ、武中秋一、堀江智、今泉冨栄、阿部涼子、
飯塚千比呂、小柳桂二、神田康裕、田中朝子、永井正二、
野嶋美惠子、有限会社藤兵衛工房山田宏高、渡辺敦、
今井雄介、金子裕、神田忠男、栗原道夫、斎藤昌志、
鈴木芳枝、髙野晶文、髙橋鐵雄、田村智江、本間一夫、
丸山進、村田洋子、米田ナホ、五十嵐幸子、石月繁朝、
市川克夫、岩﨑行人、大橋健治、大橋富男、勝沼英一、
栗原眞佐子、黒川裕一、髙坂弘子、小杉英雄、近藤朝子、
坂井定榮、酒井肇、坂上則子、佐藤謙次、佐藤祐子、
佐野典伸、鈴木美正、田尾斐、田巻淑子、中原裕太、
成田靖子、長谷川フミ、早川俊夫、深澤達夫、本多義夫、
本山高平、松岡要、丸山眞左子、山崎貞子、湯浅輝子、
吉田喜一郎、若林誠、若林道子、渡邊一。

☆他、多数の方々からご協賛を賜りました。（順不同）

【諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業　実行委員会委員名簿】

顧問（故）諸橋晋六
名誉会長　須藤謙亮
実行委員長　佐藤海山
佐野典伸
渡辺敦
小柳桂二
大竹啓吾
神田康裕
杉野真司
梅田純子

【ワーキンググループ】

大竹晴義
杉野真司
神田康裕
斉藤一子
坂上則子
佐藤祐子
オブザーバー　佐藤海山

【編集後記】

博士の生誕百三十周年という一年は、怒濤のように過ぎ去りました。ご講演を頂いた諸先生方の陣容と内容もさることながら、市外はおろか県外からも聴講に来てくださった方々を拝見しておりますと、つくづく、諸橋博士は偉かったのだという思いを新たにいたしました。

博士の生誕百三十周年事業に際し、何と申しましても残念なことは諸橋晋六実行委員会顧問の訃報でした。心よりご冥福をお祈りいたします。合掌

この小冊子を作成編集するにあたり、実行委員会編集担当の力不足を露呈してしまいました。本誌収録の各先生方のご講演内容は、実行委員会編集担当が概要をまとめさせて頂き打込み作業を致しました。魯魚の誤り等は、全て実行委員会の責です。

後記を書きながら、諸橋轍次博士記念漢詩大会の審査委員長をされた、名古屋学院大学の黄名時教授のお顔が浮かびました。この段階ではどうしようもありませんが、一文お願いすれば良かったと後悔しております。ほかにも、当然原稿依頼をさせて頂くべき方々がいらっしゃいますが、何卒、ご容赦のほどお願い申し上げます。

末筆ながら、講師の諸先生方をはじめ大修館様、諸橋漢詩大会同様に用紙提供をして下さった北越紀州製紙様、諸橋博士との対談録掲載を許可下さった石井裕子様、祖父の思い出の掲載を快諾された諸橋達人様、予算ゼロから始まった記念事業誌作り、下田地区の浄財集めに同行して下さった小柳さんと飯塚さん、そして、三条市、諸橋轍次記念館並びに須藤名誉会長をはじめとする関係者、さらに、中華人民共和国駐新潟総領事館をはじめとする後援・広告・協賛を頂戴した方々に衷心より感謝申し上げまして擱筆とします。

（編集担当）

〔非売品〕

清風の人　諸橋轍次博士を偲んで

諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業誌

平成二十六年三月三十一日　発行

編集・発行人　諸橋轍次博士生誕百三十周年記念事業実行委員会

住所　〒九五五―〇一三一　新潟県三条市庭月四三四―一　諸橋轍次記念館内

電話・ファックス　〇二五六―四七―二二〇八

用紙提供　北越紀州製紙（株）

製作　（株）大修館書店

印刷・製本　壮光舎印刷（株）

コメリ

〒950-1492　新潟市南区清水 4501 番地 1
TEL:025-371-4111　FAX:025-371-4141
http://www.komeri.bit.or.jp/

きれいな地球で暮らしたい。

外山産業グループ

URL　http://www.toyama-sn.co.jp

住・生活関連商品の卸商社
外山産業株式会社

住・生活関連商品の企画販売
株式会社 グリーンライフ

住・生活関連商品メーカー
外山工業株式会社

外壁洗浄・住・生活環境のリフォーム
株式会社 メッツ

三条市南四日町4-1-9　TEL 32-6041(代)　FAX 32-6044

個性が光る
北越紀州製紙

出版・印刷用紙からパッケージ用紙、多彩な色調・質感のファンシーペーパー、そして情報用紙、工業用素材まで、北越紀州製紙の製品はどれも個性派ぞろい。
北越紀州製紙は、さらに紙の限りない可能性を追求し続けます。そして、海外植林木や国産里山材の活用など、地球の資源・環境にも心を配ってまいります。

●出版・印刷用紙
●板紙
●ファンシーペーパー
●情報用紙
●工業用素材

ECO-PULP
エコパルプ® 植林紙®

*未来へ、豊かな紙文化を— 北越紀州製紙株式会社
〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町3-2-2 ☎(03)3245-4500
www.hokuetsu-kishu.jp

冠婚葬祭 VIP グループ

「さよなら」より「ありがとう」で送るご葬儀を。

VIPシティホール

ＶＩＰで思い出に残るご葬儀を

「エンバーミング」が大切な人に尊厳と安らぎをもたらします

もしもの時のフリーダイヤル
フリーダイヤル 24時間 至急救急 0120-24-4999
冠婚葬祭ビップ 検索
http://www.vip-group.co.jp/ch/

パール金属株式会社
本 社 〒955-8588 新潟県三条市五明190番地
TEL 0256-35-3111(大代表) FAX 0256-35-3120

http://www.p-life.co.jp
http://www.captainstag.net/

Marusho.D
株式会社 丸正土木

社団法人新潟県産業廃棄物協会会員
社団法人新潟県解体工事業協会会員
新潟県コンクリートリサイクル協議会会員

エコアクション21
認証・登録番号 0003024

株式会社 丸正土木 解体工事、一般廃棄物・産業廃棄物収集運搬
〒955-0166 新潟県三条市上大浦441-1 TEL0256-46-3635 FAX0256-46-3251
資源循環リサイクルプラント 産業廃棄物中間処理再生（破砕・焼却・焼成）
〒955-0147 新潟県三条市中野原443-1 TEL0256-46-5056 FAX0256-46-5046

薪の格安販売

ホームページ
http://asahi-doken.com/
薪朝日 で **検索**

株式会社 朝日土建

三条市桑切436-3
TEL (0256) 46-2236㈹
FAX (0256) 46-3120

株式会社 早川組

〒955-0158 新潟県三条市原655
電話（0256）46−4703
FAX（0256）46−5122

株式会社 吉田組

代表取締役社長 吉田英達

三条市荻堀700−1
TEL(0256)46−4656㈹
FAX(0256)46−4691

地域発展のために貢献する

一般土木・建築・管工事から家庭の雑用まで承ります。

特定建設業

鈴喜建設株式会社

代表取締役社長 鈴木喜義
常務取締役 鈴木正喜

三条市笹岡1907-2
TEL(0256)46-2444㈹ FAX(0256)46-2524

伝わる
デザイン
http://m-zoo.co.jp

Direction Edit Surprise
演 編 驚
Impact Glad Native
響 嬉 地
Design

有限会社 エムズグラフィック
M's Graphic
〒955-0845 新潟県三条市西本成寺2丁目4-14 NKタウンS
TEL:0256-35-8277 FAX:0256-35-8278

県央地域のランゲージパートナー

□ 語学スクール　中・韓・英・伊・仏・露
□ 通訳・翻訳　中・韓・英・その他
□ ビジネスサポート　外国語 DTP、電話通訳

China Network チャイナネットワーク

チャイナネットワーク
955-0046 三条市興野 2-2-58 りとるたうん A2-1
TEL: 0256-33-0471 / FAX: 0256-34-2917
URL: http://www.chinanetwork.jp / email: info@chinanetwork.jp

RANPOKU

嵐北産業株式会社
代表取締役 刈屋 哲

〒955-0166 新潟県三条市上大浦965番地
TEL 0256-46-2313　FAX 0256-46-4894
ホームページ　http://www.ranpoku.com

景勝八木ヶ鼻を望む露天風呂

入館料	大人 タオル付	子供 タオル付
昼	850円	600円

午後5時以降200円引き

諸橋轍次記念館から車で3分！

八木ヶ鼻温泉 いい湯らてい
三条市南五百河16-1　TEL 0256-41-3011

CORONA

祝「諸橋轍次博士 生誕130周年」

コロナは「誠実と努力」の創業精神のもと
常にお客様の暮らしと向き合い、独自の技術や事業を通して
社会への貢献に努めてまいりました。
これからも、お客様の期待に応え、発展を続けていくため、
私たちコロナはさらなるチャレンジを続けてまいります。

暖房機器
空調機器
住宅設備機器
アクア・エア機器

石油ファンヒーター

ヒートポンプエアコン

エコキュート

ナノリフレ

株式会社コロナ
http://www.corona.co.jp/
本社／〒955-8510 新潟県三条市東新保7-7 TEL.0256(32)2111(代)

大漢和辞典

全15巻

東洋文化史上に燦然と輝く永遠の大著

諸橋轍次［著］　鎌田正、米山寅太郎［修訂増補］

▼親字五万字、熟語五三万語。古今の辞書、および詩経・論語・孟子・老荘をはじめとする先秦の文献から唐宋の詩文、明清小説、歴代の史書などに至るまで、あらゆる資料を渉猟参酌して収録。▼一般のことばはもとより、文学・思想・歴史・仏教・神道の用語や、動植物名・人名・書名・地名・帝諡・年号などの項目を最大限に網羅。漢字文化圏共有の百科事典として広範囲に利用できる。▼解釈の詳細さと、その典拠となる訓詁と出典・用例の豊富さは、類書にない特色。　●B5判・上製函入・総計約一八、〇〇〇頁

●各巻定価＝本体一六、〇〇〇円＋税

●セット定価＝本体二四〇、〇〇〇円＋税

（揃っていますか？ 必備の2巻）

第14巻 語彙索引

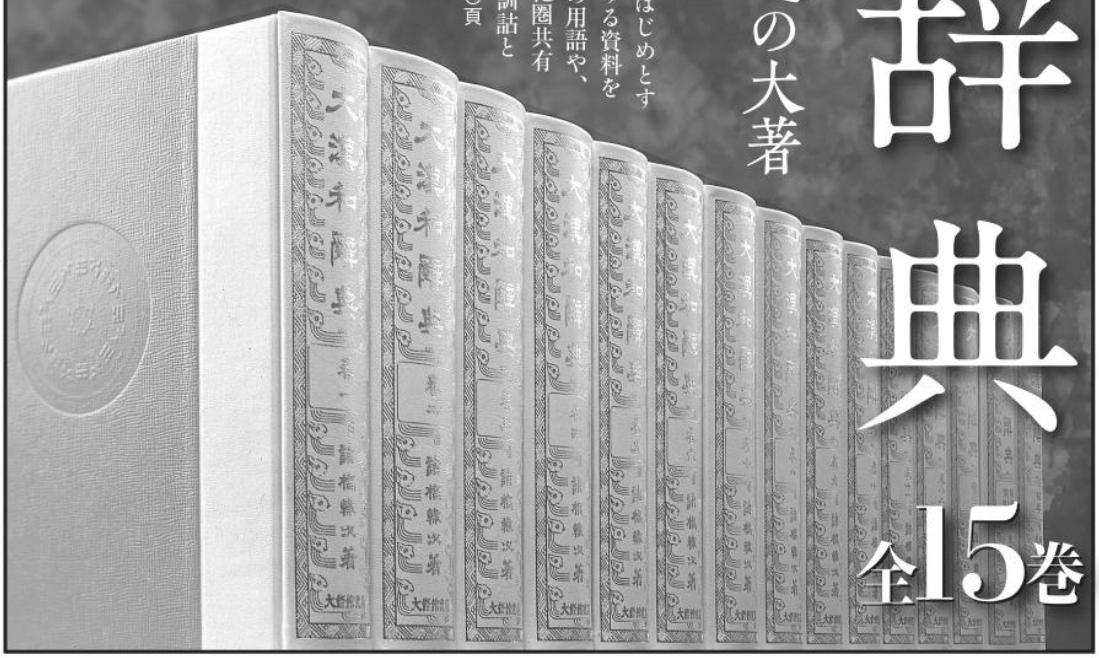
取録語彙を五十音順に配列。熟語がすぐ探せる、大漢和の必需品。

●定価＝本体一六、〇〇〇円＋税

第15巻 補巻

わが国の漢籍を読むうえで必要な語彙や、国字・人名などを大幅増補。

●定価＝本体一六、〇〇〇円＋税



大修館書店　〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1
電話03-3868-2651（販売部）
http://www.taishukan.co.jp